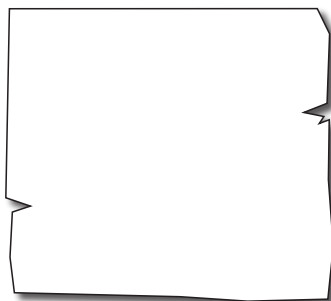


7 THE 7 FRAMES FOR ALL LIFE 7つのワクワク枠

エピローグ ～分岐点～



木 岬 さんぽ
KIMISAKI SAMPO

地球人類も
いつかここへ——。

妻^{るね}瑠音、親友^{ここえ}心笑君、おじいさん…と生み出し合う
青年期 - 壮年期さんぽのフルーツフル誕生物語

SAMPO FRUITS



7つのワクワク粋

エピローグ

’94 春（7 ヶ月後）

学生当時の、その研究発表の内容は、そのまま論文にまとめられ、マイナーな文献に掲載された。しばし反響があったらしかったものの、その後、ほとんど、みんなに忘れ去られてしまったらしかった。

’01 夏（6 年 10 ヶ月後）

僕と瑠音は、結婚した。

婚約指輪を手渡してたくせに、どうしても口から言えないまま、それぞれ家路についてしまったのちに、その頃から世の中に普及し始めていた携帯電話のメールで伝えた。

君は、自分以上に大事な宝です。結婚しよう。さんぽ。

ありがとうございます。よろしくお願いします。瑠音。

——ありがたいのは、こっちの方こそだった。

それから、夢見ているみたいに幸せな新婚生活の日々が続いた。

’08 春（14 年 6 ヶ月後）

ウェブサイト作りが一段落して、生まれて初めてウェブサイトをアップした。

それから、しばらく経ってからのことだ。

妊娠検査薬の陽性が確認されただけでなく、瑠音のお腹の中で、

小さな心臓の拍動のピコピコが初めて確認されたのは——。

ミラクルだと感じた。

心底ありがたいと感じた。

こうして、僕は、赤ちゃんを授かったのだ。

このまま、無事育ってくれ！

わが家の新たな宝になってくれ！

そう願いつづけた。

’09 冬（15 年 4 ヶ月後）

その日、仕事を終えて間もなく、瑠音の陣痛の知らせを受けた僕は、職場から病院へと急いで自動車で行った。

瑠音の出産に立ち会った。

その最中、出産が命懸けであることを肌身で感じ続けた。

どれくらい時間が経ったのだろう。どれくらいハラハラしたのだろう。どれくらい心が揺さぶられたのだろう。

瑠音は、ついに、赤ちゃんを出産した。

母子ともに無事だった。それが何よりだった。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。
音楽イン ♪ Birthtime

すやすや眠っている赤ちゃんを、ほっとして心笑みながら見つめている母の安らぎの時間——。

これで、僕は、もういつ死んでもいいや。

ぶっちゃけ、一瞬そう思っていたほどの自分が、そこにいた。

それから、さらに夢見ているみたいに幸せな日々が続いた。

音楽フェード・アウト ♪ Birthtime

’09 初夏（15年7ヶ月後）

あの岬にて——。瑠音に抱かれている赤ちゃん——。

「おお、おまえさんたちの赤ちゃんかい？」とおじいさん。

「そうだよ」と僕。

「おお、おお、とっても、かわいらしいのお」 笑みを浮かべながらのぞき込むおじいさん。「——どっちかっていったら、母親に似ておるな？」

やさしい笑みを浮かべている瑠音。

「頭の“2つのつむじ”の位置は、父親とそっくりだぜ。アハハッ」

「どれどれ——、——あつ、本当じゃ。そっくりじゃ。

アッハッハッ！」とおじいさん。

「アハハハッ」と瑠音。

瑠音は、おじいさんに赤ちゃんを抱っこさせた。

やわらかな笑みを浮かべ続けているおじいさん——。

「わしゃあ、幸せもんじゃ。すごい幸せもんじゃ。ありがとうよ」

“3つ＋1つ”の笑顔がそこにあった——。

’09 夏（15年10ヶ月後）

「ワッー !!!」 瑠音の絶叫が家じゅうに響き渡った。

別の部屋にいた僕は、ドキリ！として、あわてて駆けつけた。

「いったい、どうしたんだい！？」と僕が尋ねた。

「おむつ取り替えようとしていたら、突然おしっこが始まったの。

噴水みたいに——。もう、びっくりしすぎちゃったよ～！」

「——」・・・

’09 初秋（16年後）

我が子のお昼寝の前に、『Birthtime』のメロディーを使い、抱っこして子守唄のように歌ってあやしたり、おんぶして小さなキーボードで演奏してあやしたり…試行錯誤を繰り返していた。

’09 初冬（16年3ヶ月後）

「おお!!」 「やったあ！」

我が子が初めて歩いた日——。

’10 春（16年7ヶ月後）

我が子と一緒に、初めてと公園まで散歩した日——。

毎日、ますます夢見ているように幸せだった。

’11 春（17年6ヶ月後）

大震災が直撃したのは、第2子の出産が近づいていた頃だった。

岬のおじいさんは、高台に逃げて無事だったけれど、家が地震と津波で全壊してしまい、仮設住宅で暮らし始めることになった。

’11 初夏（17年8ヶ月後）

再び、瑠音の出産に立ち会った。出産が命懸けであることを、再び実感した。母子ともに無事であったことに、心から感謝した。

こうして、我が家に、新たな宝が増えた。

’11 夏 (17年11ヶ月後)

みんなで帰省した折、仮設住宅のおじいさんの元へ。

ニコニコしながら紡がれた、おじいさん語録——

「おお、こりゃまた、かわいらしい子じゃ。おめでたいやき」

「上の子も、ずいぶん、大きくなったのお。ありがたいやき」

「わしゃあ、もう大満足じゃ。いつ死んでもいい」

「アイアイ愛じゃな。ワクワク粋、イキイキ息シリーズの最新版が見つかったわい。アッハッハッ！」

’11 初秋 (18年後)

岬のおじいさんが老衰のために亡くなった。

おじいさんからの手紙には、感謝の気持ちがつまっていた。

若者たちへ

先日は、尋ねてきてくれて、どうもありがとう。

うれしかった。

どんなに苦しいときでも、ありがたさを見つけられる。

じゃから、どんなに苦しいときでも、笑っていられる。

それが人生じゃ。

幸せに生きるんじゃぞ。

これまで、本当に、どうもありがとう。

ありがとう。じゃあに。

岬のおじいさんより。

追伸、ちびちゃんたちにもよろしく。

追追伸、“アインシュタイン”にもよろしく。

’13 初夏～ (19年8ヶ月後～)

『大栗先生の超弦理論』という本に出会って、衝撃を受けた。

この本との出会いをきっかけにして、全く予想外に、物理学の特
大ブックサーフィンが始まり、物理学にのめり込むことになった。

それは、3ステップス自然哲学——3ステップス自然知愛の適用
範囲をさらに深く広げようとする試みにつながっていた。

’14 初秋 (21年後)

それから1年ほどの間、自己流で物理学に取り組んだ結果、光子
や重力子の幾何モデルが生まれ、半信半疑だったけれど、ついに、
重力が量子化できたかなと思えるような成果にまでたどり着いた。

でも、その成果は、従来の物理学の常識、“エネルギー保存則”と
真っ向から対立していた。

教科書に載っているエネルギー保存則が間違えているはずがない
し—— こっちの重力の量子化が間違えているにちがいないだろう。
それにしても、いったい、どこが、どのように間違えているのだろう？

・・・

そのときだ。高校時代の心笑君のレアな笑顔が心に思い浮かんだ
のは。心笑君——ニュートン君、なつかしいなあ。

彼は、難解な数式がびっしり並ぶ物理学の教科書を読んでいたと
きもあったっけ——。

チンプンカンプンだった僕が「ずいぶん、すごい本読んでいるね」
と思わず口にしたとき、心笑君は、「100%理解できているわけじゃ
ないけど、僕もニュートンやアインシュタインみたいに、早く自然

(nature) のパズルを解いてみたいんだ」と、そっと僕に打ち明けてくれた――。

彼は、授業中に鋭い質問を投げかけていたこともあったっけ――。

「なぜ、 $F = ma$ が成り立つのですか？」と心笑君。

「それこそ、天才ニュートンが発見したことだからです」と先生。

『プリンキピア』には、 $F = ma$ の式がどこにも載っていません」

「厳密には、18 世紀の数学者がこのような数式に表したからです。

それでも、その数式の起源は、まさに天才ニュートンの発見です」

「天才ニュートンは、どうやって、それを発見したのですか？」

「わかりません。ニュートンに聞いてください。ニュートン君」

どっとクラスメイトたちが笑った――。

ニュートン君――心笑君は、とりわけニュートンのファンであり、熱く語っていたっけ――。

「ニュートンって、すごいんだぜ」

「どんなふうに、ニュートンは、すごいんだい？」

「アインシュタインも成し遂げられなかったような大きな統合を成し遂げながら新しい物理学を体系化し、自然 (nature) との調和性を高めていたという意味で、すごいのだ」

「大きな統合――」

「ニュートンは、例えば、地上の物理学と天上の物理学を統合し、さらに、それまでの物理学の成果、コペルニクス、ケプラー、ガリレオ…の成果を統合したのだ」

「へえー。ニュートンってすごいんだね。てっきり、アインシュタインの方が、ニュートンよりもすごいと思っていたけれど――」

「ううん、比較なんてできないさ。確かに、アインシュタインも、すごいんだよ。それまでの常識を覆しながら、自然 (nature) との調和性をより高めるような発見を成し遂げているからね。

どちらとも、それぞれに、それぞれのすごさを持っているのだ」

「確かに――。――うん。君は、きっと、君にしかできない何かを成し遂げて、21 世紀のニュートンになれるよ」

「ありがとう」 そう言って、レアな笑顔を見せてくれた心笑君。

あの心笑君――ニュートン君なら、きっと、何か教えてくれるにちがいない。今ごろ、彼は、いったい、どこで何をしているんだろう？

’15 冬 (新春) (21 年 4 ヶ月後)

ニュートン君――心笑君と再会したいという思いが募った僕は、お正月に地元へ帰省した折に、彼の自宅を訪れることにした。

彼は、意外にも、大学院を中退して、帰郷して地元の高校の物理教師になっており、もうすでに 10 年近く経っていた。

久々に再会した心笑君は、これまた意外にも、名前らしく笑みをたたえ続けていた。もう笑顔がレアではなくなっていたのだ。

ニコニコしながら紡がれた、心笑君語録――

「教師になったのは、確かに最初は生活のためだったけれど、意外に面白いんだ。“先生、どうして $F = ma$ が成り立つんですか？”という質問を生徒から受けた暁には、内心、震えるほど興奮して、しばらく脱線してしまったよ」

「それでも物理学をする夢は、ずっとあきらめていなかったよ」

「コツコツと自由に学問を続けていたんだ」

「今の自分はボランティア学者みたいなものだね」 …

そんな彼に、彼の書斎で、さっそく、例の成果を見せてみた。

彼は、食い入るように読んだ。何度も読み返していた。

「どうもありがとう——」 心笑君が、しみじみとつぶやいた。かと思うと、「——うん、間違いない。ここから育まれる物理学は、従来の物理学を根底から改善させながら、自然 (nature) との調和性をより高められる可能性がありそうだよ」と続けて言った。

「——え？ でも、エネルギーが保存されていないよ。

従来の物理学の常識と真っ向から対立してしまっている。だから、きつと、どこか根本的に間違えているんだろうね」と僕。

「——間違えているのは、従来の物理学の常識の方、例外のないエネルギー保存則の方さ」 全く意外な答えが返ってきた。

「え？ でも、エネルギー保存則は、常識中の常識だぜ？

いくらなんでも、それは、ありえないんでないかい？」

「その気持ち、とつても、よくわかるよ。僕も同じだったから。

でも、よく確かめてみたら、例外のないエネルギー保存則の方が間違えていると納得できるのさ。例外のないエネルギー保存則は、よく確かめられてこなかったウワサにすぎなかったってことなのさ」

「——たとえ親友の君の言葉でも、さすがに納得できないよ」

「——実証するよ。例えば、ここにりんごがある」 心笑君は、りんごの1つを手を持った。「ここでりんごを手放せば、どうなる？」

「落ちるよ」

「落ちて、そのあとどうなる？」

「落ちて、そしたら、大きな音が出て、りんごの一部がへこんで、

そのあと、りんごが転がるよ」

「そのとき、大きな音が出て、りんごの一部がへこんで、転がる際のエネルギー源は何だい？」

「位置エネルギーだよ。落下すれば、位置エネルギーが運動エネルギーへと転換する。その運動エネルギーが、大きな音を生んだり、りんごの一部をへこませたり、りんごを転がしたりするのさ」

「その通りだね。学校の授業で習った通りだよ。

では、次に、このりんごを、そうっと床に置いたらどうなる？」

「どうなるって——」

「大きな音、りんごのへこみ、りんごの転がりは、どうなる？」

「生じないよ」

「その通り」 心笑君は、実際にそうとりんごを床に置いてみてから口を開いた。「ここで疑問に思わないかい？」

「どんな疑問？」

「大きな音を生じたり、りんごをへこませたり、りんごを転がしたりできたはずのエネルギーは、どこへ行ったのか？ って疑問さ」

「——どこへ行ったんだい？」

「消滅したのさ。そのことが、以上で実証されたことになる」

「ええ？！ 待った、待った。でも、エネルギー保存則によれば、エネルギーは消滅しないはずだよ。きつと、大気との摩擦熱とかに変化して、エネルギーが逃げたんだよ」

「同じような実験は、空気がほとんどない真空中でもできるよ」

「——」 ……

「確かに真空中では音が出ないけれど—— 落ちたりんごは、へこ

んだり転がったりするはずなのに、そうっと下ろせば、りんごは、へこまないし転がらない。大気との摩擦熱や音としてほとんどエネルギーが逃げようがない真空中において、りんごをへこませたり転がしたりできたはずのエネルギーは、いったいどこへ行ったんだい？」

「——」・・・消滅したとしか考えられない？ 「——ええ？！エネルギーって、実は消滅するの？」

「そうさ。同じような実証実験は、卵や陶器の皿でもできる」

「——確かに」

「しかも、エネルギーが消滅する事実に加えて、自然界で一見エネルギーが保存しているように見えている事実があるから——自然界のどこかでエネルギーが生成していなければおかしいってこともわかる。つまり、エネルギー消滅の実証実験から、エネルギーは、どこかで生成しているはずだってことも無理なく予想できるのさ」

「——」・・・

「実際、エネルギーの生成の例は、見つけられる。

例えば、従来の量子物理学においてさえも、すでに、短時間であれば仮想粒子が生成&消滅することを認めている。この仮想粒子が生成&消滅する過程では、平均エネルギーがプラスマイナス0であり続けているのではなく、その短い時間の間、平均エネルギーがプラスであり続けていて、その間エネルギーは生成しているんだ。

しかも、時空が不連続ならエネルギー保存則が成立しないことを、ネーターの定理が証明している。だから、プランクスケールで時空が不連続である君の成果において、光子や重力子の生成過程がエネ

ルギーの生成過程であっても全く問題がなくなるんだよ。

これらの意味で、エネルギーの生成は、自然 (nature) と調和しているだけでなく従来の物理学とも調和していることになるんだ。

しかも、例えば、電荷エネルギーや磁極エネルギーは、周囲に生成する仮想光子を何度剥ぎ取って光子を生成させても、その都度再生する究極の再生可能エネルギーでもある。この電荷エネルギーや磁極エネルギーからエネルギーを引き出す方が、質量エネルギーからエネルギーを引き出すより、はるかに安全で桁外れに効率がいい。例えば、陽子1つ分の質量エネルギーよりも、陽子1つ分や電子1つ分の電荷エネルギーの方が、 10^{18} 倍以上も大きいから」

「 10^{18} 倍以上——」 チンプンカンプンで意味もよくわからないまま、僕は、その部分を繰り返した。——心笑君には、かなわないや。

「そうさ。この桁外れに効率のいいエネルギー源こそが、あらゆる電磁波のエネルギー源でもあるんだ。太陽から地球へ届く光、電気ストーブから放出される赤外線、携帯電話やスマホから放出される電波も例外じゃない。もちろん、電子等の電荷が振動する際に、熱運動エネルギーとして周囲に散逸する形ではエネルギーが消費される。でも、同じ際に、生成した仮想光子がはぎとられて電磁波が周囲に放出される形だけではエネルギーは全く消費されないんだ。だから、太陽の寿命は従来の質量エネルギーを用いた計算より延びるし、健康被害を含め最近悪者にされることの多い電磁波は、上手に利用できれば、本来、人類の大きな味方になりうるのさ」

そこで、僕は決意を固めた。「——心笑君、ここから先は、ぜひ、心笑君が育ててみてくれるとうれしいんだけど、どうかな？」

「本当にいいのかい？ これを十分に育めれば、物理学を成熟させられて、もしかしたら本当に21世のニュートンになれるかもしれないんだぜ？ こんなに、やりがいがあってワクワクできる学問分野は、めったにないんだぜ？」

「いいも何も、誰より心笑君こそが最適役だよ。

それに、その方が、きっと全人類のためにもなっているよ。

——それに、恩返しでもある。

僕らが結婚できたのは、君のおかげでもあるのだから——。

それに、この試みが成功したら、これがきっかけとなって、君に、いい縁談話が舞い込むかもしれない」

「——フッ」

「心笑君—— 君こそ、21世紀のニュートンになってほしい。

それこそが、僕や瑠音を含めて、みんなが喜ぶことさ」

「——ありがとう。

実は、恩返しすべきなのは、こっちの方こそなんだよ」

「——え？」 ???

彼は、机の引き出しから、ある文献を取り出した。

それは、20年以上前の学生時代に僕が書いていた、あの論文を収録した文献だった。見るからに、ぼろぼろになっていた。

「それは——」

「そう。君の研究論文さ。君の成功が心底うれしくて、すぐ購入して、当時から読んでいたんだよ」

「——」

「結構ぼろぼろになってしまったけれど、ぞんざいにあつかったり、

保存状態が悪かったりしたせいじゃないんだぜ。何度も何度も読み返したからなんだ。ここ20年くらいの間に、何十回何百回と読みかえしているよ」

「——」 言葉にならなかった。涙が込み上がり、しばし、涙ぐんだ状態のまま涙をこぼすのをこらえた。

「それで、君の論文がヒントになって—— 実は、僕も、すでに新しい物理学を育んでいたんだよ。大学院に進学した頃から——。

この新しい物理学は、大学院を中退して帰郷する心の支えにもなっていた」

「——」 . . .

「だから、君の重力の量子化と、僕の重力の量子化が、瓜二つであるのを見て、驚いただけでなく、心底うれしかった。

それを見て、確信したんだ。間違いのないんだって——。

自分が進んでいる道が間違えていなかったんだよって、本家本元から、お墨付きをもらえたような気分だよ」

「——」 . . .

「君と僕は、別々に同じことを発見したことになるんだよ。

僕は、ずっと孤独に、ひそかに、この新しい物理学を育ててきたから、そのことが、どんなに心強いことか——」

彼は、机の引き出しから、プリントアウトされてクリッピングされていた用紙の束を取り出すと、重力の量子化の成果が載っているページを広げて見せてくれた。

確かに瓜二つだった。それでも、彼の成果の方が、はるかに厳密で、はるかに深みを持っていることは、一目瞭然だった。

ページを閉じた彼は、「まだまだ完全からほど遠くて未完成なのだけれど——」と言いながら、その用紙の束を、僕に手渡してくれた。

僕は、しばらく食い入るように読みながらページをめくり続けた。

心笑君が、はるかに先に、はるかに広く進んでいることは明らかだった。彼は、3ステップス自然哲学——3ステップス自然知愛の適用範囲を、物理学のほぼ全分野にまで広げていた。

「時間は無限じゃないから、どこかで切り上げなければならないんだけどね」心笑君は、静かに、そう言った。

心笑君は、素スピノル物理学としての体系化をすでに見事に成し遂げ、新しい物理学を誕生させていたように思われた。

それは、まさに、心笑君の健やかな自己実現——自己フルーツ化、そして、彼らしいフルーツの現出だった。

その成果には、さまざまな統合も含まれていた。

重力と電磁気力の統合

重力子と光子の統合

質量エネルギーと、電荷エネルギー&磁極エネルギーの統合

原始的な力、弱い力、強い力、中間子力のフラクタルな統合

素粒子物理学の標準模型における“3つ世代”のフラクタルな統合

静止質量エネルギーと運動エネルギー（≒熱運動エネルギー）の統合

ブラックホールの特異点とファイヤーボール（ビッグバン）の統合

新しいブラックホールの生成と新しい宇宙の生成の統合

...

それらの成果を読み取った僕は興奮しながら口を開いた。「すごいよ！！ アインシュタインもできなかった統合を成し遂げているよ！！ 自然との調和性が高まっているよ！！

間違いないよ！！ 君は、まさに21世紀のニュートンだよ！！

早く公表しようよ！！」

「——ありがとう。

でも、まだ自信ないんだ。まだまだ完全から、ほど遠いから——。

それに、まだまだ改善の余地があるはずだけでなく、大きく間違えているところもあるかもしれない——。

本物のニュートンも、自身の研究成果の発表をためらっていたらしいけれど、その気持ち、今、とてもよくわかる気がするんだ」

「——不安なんだね？」 似た気持ちを自分も経験していたような気がしていた。

「ああ、不安さ。それに、間違えているかもしれない不安だけでなく、博士号を持っていない不安、きちんとした研究ポストにも就いていない不安もある」

「博士号や研究ポストも、ときに確かに大事だよ。でも、君もよく知っているように—— ニュートンは、ペストで学校が閉鎖されて帰郷した奇蹟の2年の間に大きな成果を生んだとき、博士号も研究ポストも持っていなかった。アインシュタインは、奇蹟の年に発表した3つの主要な論文を特許局に勤めながら書いていたとき、博士号も研究ポストも持っていなかった。ついでに僕も、大学生のときの成果を生んだとき、博士号も研究ポストも持っていなかった。

博士号も研究ポストもないからこそ、かえって生み出しやすい成果も、きっと、あるはずなんだよ。大学から離れ、身分のしがらみから解放された自由空間の方が、かえって生み出しやすい成果も。

それに、博士号 Ph.D、ドクター・オブ・フィロソフィー (Doctor of Philosophy) の肩書きも、ときに大事だけれど、その一方で、ニュートンやアインシュタインのように、フィロソフィーの実践者、最初の一步から自分の頭で考え直す知愛の実践者——フィロソファー (Philosopher) であることも、ときに大事なのさ。

心笑君も、そう思うだろ？」

「——ありがとう。確かに、僕もそう思うよ。

——それで、提案なんだけれど、一緒に連名で公表しないかい？

重力の量子化の説明は、ふたりともが別々の発見者だったのだし、そもそも、君の成果である3ステップス自然知愛が大いに役立っていたのだから」

「——うれしいよ。ありがとう。

でも、それは、おこがましいよ。こっちは、ちょっとした思いつきを、片手間に、ちょこちょこっと細々と試してみただけの話さ。

本物のニュートンのように、統合を果たしながら新しい物理学を体系化し、自然との調和性を高めているのは、まさに、心笑君、君なんだよ。3ステップス自然知愛については、それが役立っていたことを、さらっと触れてくれるだけで、こっちは十分満足だよ。

この各種の統合を含む物理学の新しい体系化、自然との調和性の向上は、まぎれもなく君が誕生させた成果であり、すべて君の業績であるべきなんだよ。

その方が、21世紀のニュートンとして、誰もが納得できることだよ。それに、その方が様になっていてカッコいいよ。

よっ！ 21世紀のニュートン！ 人類の宝だよ！」

名前らしく笑みたたえていた心笑君が、さらに笑顔になった。

’16 初夏 (22年9ヶ月後)

それから1年半近く経った頃、心笑君の新しい物理学の体系は、さらに磨き上げられて、ついに公表されるに至った。

“時間が無限でないから”という条件の中の妥協の産物の一面もあったとのことだったけれど、心笑君らしい見事なフルーツだった。

さまざまな新しい統合が示されていたのみならず、健やかな全人類レベルのライフの誕生のためにもなるだろう、画期的な応用にたどり着くためのヒントも示されていた。

心笑君は、かつて人類が2000年間地球中心の思い込みにとらわれていたように、これまで人類が300年間エネルギーの永久不滅の思い込みにとらわれていたことを指摘した。

心笑君は、“エネルギー保存則が成り立つからエネルギーは消滅も生成もしない”とは決して言えないことを指摘した。

心笑君は、エネルギーの消滅を、“ニュートンのりんご”ならぬ“ココエのりんご”と象徴的に呼んでもいいような、簡単な実験で実証できることを指摘した。

心笑君は、電荷エネルギーや磁極エネルギーが究極の再生可能エネルギーであること、それらが例えば太陽光のエネルギー源であることも示した。

心笑君は、陽子や中性子といった核子1つの質量エネルギーよりも桁外れに大きい、電子1つの電荷エネルギーや磁極エネルギーから、はるかに安全に桁外れに効率よくエネルギーを引き出せる可能性を示した。

心笑君は、この新しい物理学によって、さまざまな問題を根本的に解消できる可能性があることを指摘した。

…

これらの新しい物理学の成果は、自然科学に革命をもたらすだけでなく、健やかな全人類レベルのライフの誕生のためにも、健やかに天体生態系社会レベルのライフの一員になるためにも役立ち、多くの人々を喜ばせられるはずだと僕は確信し始めていた。

心笑君は、「これらの成果の一部は、もしかしたら本当にいて何万年何億年も存続しているかもしれない宇宙人にとっては、すでに常識的な内容であるかもよ」とも冗談半分で言っていた。

心笑君は、きっと、多くの人々に祝福されながら、もっともっと幸せになれるだろう。僕は、そう確信し始めていた。

’16 初秋 (23 年後)

ところが、心笑君は、非難され、けなされ…ネガティブに批判されまくったあげく、失職しただけでなく—— 突然、病気で亡くなってしまったんだ。その知らせを受けたのは、初秋だった。

なぜ？ なんて？ 音楽イン ♪ 秋 Autumn

——心笑君は、うすうす気づいていたんじゃないか？

こうなる可能性があったことを、はじめから——。

だからこそ、連名にしようと提案していたのではないか？

連名で公表していたら、僕が手伝っていたら、心笑君の不安を軽減できて、心笑君は、無理しなくてすんで、病気にならずに、まだ生きていたんじゃないか？

それに、そもそも、心笑君が、従来の物理学の常識から外れて、大学院を中退して帰郷するという大変な道を歩むに至ったのは、僕の3ステップス自然知愛のせいだった。

——全部、僕のせいだ。

全部、僕のせいで、まだまだ若い心笑君が死んでしまった。

せっかく、まだまだ、これからだったのに—— …

僕は、何てことをしてしまったのだろう。

申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

心笑君が不憫で不憫で、いたたまれない気持ちになった。

僕は、自分の一部を喪失したような気持ちになった。

——彼の優しさがフラッシュバックした。

「この科学雑誌、よかったら読んでみないかい？」

「女子更衣室で、君が倒れたとき、真っ先に先生に知らせてくれたのは、瑠音さんだったんだよ。水着姿のまま校舎内を走って」

「この間、『北の国から’89 帰郷』で熱烈なファンになったって聞いていたから、準備していたんだ」

「彼女は、そんな子じゃないよ。よく確かめた方がいいよ」

「君たちが、うまくいっていると、周囲も幸せな気持ちになれる。

そんな、すてきなカップルだよ」

「ありがとう。気持ちは十分に受けとったよ。心の中で大事にさせていただくよ」

「君の成功が心底うれしくて、すぐに購入して、当時から読んでいたんだよ」

「結構ぼろぼろになってしまったけれど、そんざいにあつかったり、保存状態が悪かったりしたせいじゃないんだぜ。何度も何度も読み返したからなんだ」

…

涙があふれて、あふれて、あふれて…

僕と瑠音は、その晩、ずっと泣き続けた。

音楽フェード・アウト ♪ 秋 Autumn

’16 初秋 (23 年 2 日後)

葬儀に参列した際、心笑君のご両親が挨拶にきて、息子の親友でいてくれたことに感謝を示した上で、中学時代からの元々の持病の悪化のせいだったと説明してくださった。

そんな持病なんてあったの？

なぜ黙っていたの？ 水くさいじゃないか？

僕に気を使って、最後まで相談しないでいてくれたのかい？

いずれにしても—— 僕のせいで、大きなストレスを抱えることになってしまい、心笑君の寿命が縮んでしまったよ。

何てことをしてしまったのだろう。

ごめんよ。ごめん。ごめん。

...

心笑君のご両親は、話の最後に、クリッピングされた用紙の束と、彼が書き遺した手紙を渡してくださった。

この手紙は、万一持病が急変したときのために、前々から、準備していたものらしかった。

音楽イン ♪感謝別れ Thank you, See you.

夏岬さんば君へ

もしものときのために、手紙を書いておきます。

持病のこと、内緒にしていってゴメンよ。

高校時代からずっと、君に余計な心配をかけたくなかったから、いつもと変わらぬ親友でいてほしかったから、どうしても言えませんでした。どうか、ゆるしてほしい。

それと、今の医療の限界を、何十年もの間、身にしみて知っていたから、せっかくお医者さんになった君に相談できなかったことも、どうかゆるしてほしい。

本当は、もともと、僕は、こんなに長生きできるはずではありませんでした。実は、高校を卒業できたことも、大学を卒業できたことも、奇蹟だって主治医の先生に言われていたほどだったんだよ。

だから——

君のことだから、きっと、“自分のせいで、早く死んじゃった”とかと思ってしまおうと思うけれど、もうそれ以上、絶対に絶対に、そのように思わないでほしいのです。

決して決して、そうではありません。

全く逆です。

君のおかげで、こんなに長生きできていたのです。

高校を卒業できたのも、

大学を卒業できたのも、

そして、本物のニュートンしながらに自然知愛に没頭できたのも、どれもこれものおかげだったのです。

いつ死んでもおかしくないと前々から思いながらも、こんなに長く充実した人生を歩めていたのは、君のおかげだったのです。

特に、君の学生時代の論文のおかげで、新しい物理学に取り組むことができた時間は、夢見ているように幸せでした。

人生、捨てたものじゃないね。

人生って、こんなに幸せな気持ちになれるんだね。

夢にも思っていないませんでした。

この新しい物理学の探究は、極上のエンターテインメントの1つたりうる、ワクワク感の尽きない自然 (nature) のパズル解きでした。

同じような気持ちを、本物のニュートンも味わっていたんだろうなど何度も思っていました。

おかげで、何度も何度も、本物のニュートンの境地を体験できたような気がしていました。おかげで思う存分、物理学を心底エンジョイできました。おかげで、夢がかないました。

この極上のパズル解きの楽しみのおかげで、少なくとも、さらに10年以上、寿命がのびていたのは、間違いありません。

さらには、これらの成果を生み出せたおかげで、大きな大きな満足感を味わえています。

僕は、君のおかげで、こんなに充実した人生を満喫しながら、長生きできていたのです。

おかげで、寿命を全うできているだけでなく、寿命が最大限に延びて、完全燃焼できた感を味わいながら、大満足できているのです。

だから、もしものときは、寿命延長最高記録更新大往生なのです。だから、本当に本当に、ありがとう。

親友でいてくれて、心から心から、ありがとう。

井東心笑

P.S.

僕の物理学の研究成果、親友への手紙バージョンを、楽しんでもらえたらうれしいです。この中の数学は、ほとんど中学や高校の数学レベルだから、きっと理解できるはずだよ（って書いたら失礼かな）。極上エンターテインメントの1つを体感してもらえたらうれしいです。この楽しさや感動が少しでも広まれば、うれしいです。

それと、完全に時効だと思うから書くけれど、高校時代、瑠音さんのこと、僕も好きだったんだぜ。持病のこともあったし、何より君らの気持ちがわかっていたから、告白どころではなかったけれど。

それでも、瑠音さんの相手が君でよかったって何度も思っていたよ。相手が君だったから、なおさら、高校時代、君らがうまくいっていると、自分のことのように、うれしかった。

近年、君たちが結婚して家庭を築いていることを知り、ますます、自分のことのように、うれしかった。

君らを統合できたことこそが、僕の最高の誇りです。
なんちゃってね（笑）。

いろいろ気づいてあげられなくて、ゴメンよ。

自身の恋心をおさえさせてしまいながら、恋のキューピッド役を担わせてしまっていて、ゴメンよ。——ゴメン。ゴメン。…

こちらこそ、親友でいてくれて、ありがとう。

心から心から、ありがとう。ありがとう。

… 音楽終了 ♪感謝別れ Thank you, See you.

’17 秋（24年1ヶ月後）

とある休日——。

「みんな、今から、父さん、実験を始めるよ」 瑠音と、ちびっこたちを前に、僕は言った。「ここに、1つの卵があります。これを

約70センチメートルの高さから、静かに、そうっとフライパンの上に置けば、何が起ころうでしょう？」

「何も起きるわけじゃないじゃん」「何も起きないよ」

「本当に？」

「本当さ」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやって確かめてみよう」

卵を約70センチメートルの高さから、静かに、そうっとフライパンの上に置いた。

「ほら、何も起きないじゃん」「やっぱりだ！」

「お、正解だ。その通りだったね。うん。それでは、次の実験に移るよ。もし、この卵を、フライパンの上、約70センチメートルの高さで手を離せば、何が起ころうでしょう？」

「ええ！ 卵が割れちゃうよ」

「割れてどうなる？」

「卵の殻が割れて、中身が広がってしまう」「ベチャーとなる」

「本当に？」

「本当に」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやって確かめてみよう」

「あなた——」 瑠音の一声。

「大丈夫。僕が、責任を持つから。——では、いくぞ。やるよ。えいや！」 パツ、グシャ。 卵の一部がつぶれた。

「あれ、ゆで卵だったの？」

「残念。不正解」

「えー！ ずるいよ」「ずるーい！」

「ずるくない、ずるくない。生卵だなんて、一言も言っていないよ。つまり、こんなふうに実際に実験してみなきゃわからないことがあるってことさ。それに、ゆで卵であるおかげで、いいことがある」「どんないいことがあるの?」「ゆで卵であるおかげで、僕が気持ちよく食べられるってこと——」——パラ、パラ、パラ… モグモグモグ…。

「もし、生卵で、やってみなければ、やってみてもいいよ」「あなた——」

「あ、もちろん、責任は、きちんと自分で取るんだよ。無駄な食品ロスは、父さん、ゆるさないよ。命をいただいているのだからね。——これで、父さんの実験は、終わりだよ。あつと、ここで、みんなに問題だ。卵から手を離したら、卵は割れるのに、卵をそうっと置いたときに、何も起きなかったのは、なぜでしょうか?」「なんで?」「なぜ?」「さあ、ぜひ、自分の頭で、よく考えてみよう。自分の体で感じながら——」

’18 春 (24 年 7 ヶ月後)

とある休日——。

「父さん、今から、新しい実験を披露するよ」 瑠音と、ちびっこたちを前にして、僕は言った。「ここに、1 つのお皿があります。このプラスチックじゃないお皿、陶器のお皿を 1.2 メートルほどの高

さから、静かに、そうっと床の上に置けば、何が起こるでしょう?」「何も起きるわけじゃない」「何も起きないよ」「本当に?」「本当さ」「本当だよ」「じゃあ、実際にやって確かめてみよう」 その皿を 1.2 メートルほどの高さから、静かに、そうっと床の上に置いた。

「ほら、何も起きないじゃん」「やっぱりだ!」「お、正解だ。その通りだったね。うん。それでは、次の実験——。床の上、1.2 メートルほどの高さで、このお皿から手を離せば、何が起こるでしょう?」「ええ! お皿が割れちゃうよ」「大きな音が出る!」「そのあと、どうなる?」「皿が割れて、バラバラにくだけて、飛び散ってしまう」「本当に?」「本当に」「本当だよ」「じゃあ、実際にやって確かめてみようか?」「あなた——」 瑠音の一声。

「わかっている。父さん、ここで、手を離したりなんかしない。お皿が使えなくなったら、もったいないからね。でも、実は、5 日ほど前に、母さん、誤って手を滑らせて、お皿を床に落としてしまったことがあるんだ」「え?」と瑠音。

「——母さん、あのとき、何が起きたか説明してくれないかい?」「あのとき、確かに、ガチャン! って大きな音をたてながら、お皿

が小さくさまざまな大きさに割れて、飛び散ったわ。2メートル以上遠くに飛び散ったカケラもあったわ。

誰かが踏んづけてケガしないように掃除するのが大変だったから、よく覚えているわ」

「つまり、母さんは、すでに、先取りして実験してくれていたんだ」

「すごい」「すごいね」

みんなで拍手しよう。パチパチパチ…。——照れている瑠音。

「——これで、父さんと母さんの共同実験は、終わりだよ。

あっと、ここで、みんなに問題だ。

お皿から手を離したら割れたのに、お皿をそうっと置いたときに何も起きなかったのは、なぜでしょうか？」

「なんで？」「なぜ？」

「——ぜひ、自分の頭で、よく考えてみてほしい。

想像力をふくらませながら——」

’18 初冬 (25年3ヶ月後)

とある休日——。

「みんな、今から、父実験をするよ」 瑠音と、ちびっこたちを前に、僕は言った。「ここに1つのスーパーボールがあります。このスーパーボールを約2メートルの高さから、静かに、そうっと床の上に置けば、何が起ころうでしょう？」

「何も起きるわけじゃないじゃん」「何も起きないよ」

「本当に？」

「本当さ」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやって確かめてみよう」

スーパーボールを約2メートルの高さから、静かに、そうっと床の上に置いた。

「ほら、何も起きないじゃん」「やっばりだ！」

「おお、本当だったね。何も起きなかったね。うん。それでは、次の実験に移るよ。もし、このスーパーボールを、床の上、約2メートルの高さで手を離せば、何が起ころうでしょう？」

「簡単だよ。ポーンってばずむよ」「そうはずむ！」

「本当に？」

「本当に」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやってみよう」

手を離すと、スーパーボールは、ポーンと弾んだ。スーパーボールが最高点に到達したタイミングで、僕は、それをキャッチした。

「ほら、はずんだ！」「やっばりだ！」

「お、正解だ。予想通りだったね。

これで、父実験は、おしまいです。——そこで、問題。

スーパーボールを手を離したら、ポーンと弾むのに、そうっと置いたときに、何も起きなかったのは、なぜでしょうか？」

「なぜだろう。考えてみるよ」「ゆっくり考えてみるね」

’19 冬 (1) (25 年 5 ヶ月後)

とある日の夜、子どもたちが寝静まった後、瑠音とふたりでリビングで会話した。それは、瑠音が投げかけた疑問から始まった。

「ねえ。あの 3 つの実験は、いったい何を意味していたの？」

「エネルギーの消滅が実証されていることを意味していたのさ」

「えー！？ ウソよ。だって、エネルギー保存則があるでしょ？」

エネルギーは種類が変換されるだけで、エネルギーの総量は減りも増えもしない。中学や高校で習うことで、常識中の常識よ。

教科書にも、ちゃんと載っているわ」

「そう。僕にとっても、そのような“例外のないエネルギー保存則”は、常識中の常識だった。物理学の試験問題も、その常識のおかげで、正解にたどり着けた。

でも、実際、エネルギーは、ときに完全に消滅するのさ」

「えー？ まだ信じられないわ」

「その気持ち、よくわかるよ。僕もそうだったから。ところが——たとえば、まだ信じられなくても、エネルギーが、ときに完全に消滅することを、卵や皿やスーパーボールの、あの簡単な実験が実証してしまっているのさ。

つまり、エネルギー保存則には、例外があったってことなのさ」

「教科書が間違えていたってこと？」

「まあ、そういうことになるね。教科書の中の“この宇宙で、エネルギーは減りも増えもしない”と説明している“例外のないエネルギー保存則”が自然 (nature) から乖離かいりしていると明らかに実証されていることになるのだから。

つまり、“例外のないエネルギー保存則”は、結局、これまで、ずっと、誰も、よく確かめようとしてこなかったウワサの 1 つにすぎなかったってことなのさ。

でも、よく確かめて、よく考えてみれば、ここから新たな自然 (nature) のパズル解きを展開できるという意味で、これほどイキイキ、ウキウキ、ワクワクできること、これほど楽しみが膨らむことはない。窮屈な常識を見直して乗り越えた先に、壮大な可能性が広がっているのだから。

——そのことに、はつきり気づかせてくれたのが、心笑君さ」

「心笑君——」

「心笑君にとっても、“例外のないエネルギー保存則”は、常識中の常識だったはずだよ。高校時代に物理学でトップの成績をとっていて、大学時代に理学部物理学科に進学していたくらいだったからね。

つまり、心笑君や瑠音や僕を含めて、みんなにとって、“例外のないエネルギー保存則”は、常識中の常識だった。

だから、静かに物を置く過程なんて、これまで何十億人もの人々が、それぞれに、それこそ何百回何万回と体験していたはずなのに、その過程でエネルギーが消滅していることに、長らく誰も気づくことができなかった」

「——。ねえ、キッチンにいて、何か飲んだり食べたりしてきてもいい？」 瑠音は、足早にキッチンにたどり着くと、本当に何かを飲んだり食べたりしたらしかった。

そうして戻ってきた瑠音は、口を開いた。

「ねえ。例えば、親が赤ちゃんを静かに寝床の上に寝かせようとし

ている際に、エネルギーを消滅させていることに気づけなかったってことも言える？」

「言える。毎晩、僕らがベッドに静かに横になる際にも、誰もがエネルギーの一部を消滅させている。それほど身近でありふれている。それなのに、エネルギーの一部を消滅させていることに気づくことは、誰にとっても難しいことだった。みんなが何百回何万回と物が落ちることや月が落ちないことを目撃していたのに、ニュートンが指摘するまで、万有引力の法則に気づくことが、誰にとっても難しかったように——。

でも、その難しいことを成し遂げていたのが、心笑君だったのさ」「すごかったのね。心笑君——」

「ああ、すごかった。だから、心笑君は、少なくとも、そのことだけでも、きっと21世紀のニュートンと呼ぶに値するんだよ。

だから、エネルギーの消滅を実証している3つの実験は、古い常識から新しい常識への大転換の象徴でもあり、“ニュートンのりんご”ならぬ“ココエのりんご”とも呼べるよ」

「“ココエのりんご”——」

’19冬 (2) (25年5ヶ月後)

「心笑君は、りんごを静かに、そうっと下ろせば、りんごに傷がつかず、りんごは転がらないって説明してくれた。

この“ココエのりんご”を含むニュートン体験を通じて、そこから広がる壮大な可能性に、イキイキ、ウキウキ、ワクワクすることは、For All Life 路線を貫くためにも役立つと思うよ。

自然 (nature) のパズル解きという極上のエンターテインメントの存在に気づけば、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…ではなく、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…こそを育みやすくなるはずだから。かつて、ニュートンの著作『プリンキピア』の登場が、まさに、その自然 (nature) のパズル解きという極上のエンターテインメントの存在に気づききっかけになって、そのおかげで、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…ではなく、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…を育みやすくなっていたはずであるように——。

しかも、この極上のエンターテインメントをきっかけにして For All Life 路線を貫ければ、ますます、この自然 (nature) のパズル解きを通じた新しい自然科学が十分に発展できるようになる」と僕。

「心笑君の成果を通じて自然 (nature) のパズル解きという極上のエンターテインメントの存在に気づけば、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…ではなく、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…をより育て、おかげで、For All Life 路線をより貫けるようになるだけでなく、その結果、新しい自然科学も十分に発展しうるのね？」と溜音。

「その通り。心笑君の成果をきっかけにして、壮大な可能性の広がりによりイキイキ、ウキウキ、ワクワクしながら、For All Life 路線をより貫けて、新しい自然科学が十分に発展できれば、人間社会レベルのライフや生態系レベルのライフがより持続しやすくなるし、将来、健やかな全人類レベルのライフが誕生しやすくなるし、将来、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を果たしやすくなる」

「そっかあ。よかった。いいことづくめね」

’19 初夏 (25 年 9 ヶ月後)

さらに、僕は考え続けていた。

もし、新たな自然 (nature) のパズル解きという極上のエンターテインメントのおかげで、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…ではなく、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…こそを育むこと、For All Life 路線を貫くことが増えてくれれば—— 高校の物理教師の方々も、大学の物理学の専門家の方々も、教科書を書いている方々も、出版している方々も、メディアの方々…も含めて、だれもが助かるだろう。

イキイキ、ウキウキ、ワクワクしながら新たな段階へと、みんなが進みやすくなるのだから。

また、そのおかげで、もし“究極の再生可能エネルギー”に基づく新たな技術が For All Life 路線で健やかに普及すれば—— エネルギーを利用する方々だけでなく、エネルギーを提供する方々も助かるだろう。低コストで格安なエネルギーを供給することに目を向けられるようになるだけでなく、同時に、もっと利益を出せるって話になるのだから。

さらには、もし“究極の再生可能エネルギー”に基づく新たな技術が For All Life 路線で健やかに使えるようになれば、例えば——

環境を浄化できるようになったり

淡水を、どこでも十分に確保できるようになったり

砂漠を緑地化できるようになったり

食糧を、どこでも十分に確保できるようになったり

寒冷な地域だろうと、乾燥地域だろうと、どんな気候帯であろうとも、日照不足地域だろうと関係なく、どこにおいても豊かな自然

の恵みを十分に享受できるようになったり

大気の組成や温度をうまくコントロールできるようになったり

気候変動をうまくコントロールできるようになったり

石油や石炭の消費に伴う環境悪化への対処を不要にしたり

無理して命懸けで石油や石炭を採掘することを不要にしたり

生態系を十分に守れるようになったり

すべての人類が快適に暮らせるようになったり

燃料や食糧の奪い合いが不要になることで、みんな仲良くできて恒久的な平和がもたらされるようになったり…

つまりは、地球のすべての地を楽園化できることはもとより、その楽園をコピーする技術によって、宇宙や他の天体にも健やかに十分に進出できるようになることを含めて、いいことづくめになる。

その結果、“究極の再生可能エネルギー”に基づく新たな技術を、エネルギー産業に従事する方々が For All Life 路線で健やかに活用して普及することは、健やかな全人類レベルのライフの誕生のためにも、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化のためにも貢献する立派な行為なのだと、誰もが認識しやすくなる。

つまり、もし、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…が育まれて、For All Life 路線を貫く方々が増えて、“究極の再生可能エネルギー”に基づく新たな技術を For All Life 路線で健やかに使えるようになることに貢献できていれば—— 生態系レベルのライフのため、生態系を構成する存在たちのため、人間社会レベルのライフのため、従来のエネルギー産業に従事する方々のため、消費者の方々のため、『イマ』の方向の方々のため、『ミライ』の方向の方々のため、健や

かな全人類レベルのライフの誕生のため、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化のため…を含め、みんなのために役立っていることになる。

みんなが喜べるFor All Life路線の発展ならば、本物の発展だ！

確かに、新たな何かか誕生するとき、一部の方々にとっては、一時的な痛みがもたらされる可能性がある。

過去において、新たな何かの誕生が、一部の方々にとって、一時的な痛みをもたらしていたはずであるように――。

例えば、自動車や電車の誕生、電灯やLED灯の誕生、冷蔵庫の誕生、CDやDVDの誕生、石油や天然ガスの利用の誕生、工場の機械作り家具の誕生…において、人力車や馬車、ガス灯や提灯やろうそく、天然の氷、レコードやテープで生計を立てていた方々、炭坑夫の方々、建具職人の方々…を含めて、一部の方々にとって、一時的な失業や一時的な生計の苦しさを含め、一時的な痛みとなっていたはずであるように――。

それでも、長い目で見ても、それらの一部の方々はその仕事の大変さから解放されることを含めて、みんなのため、全人類のためになっている、“新たな業種の誕生 For All Life”であったからこそ、これらが実現し、定着したのではないだろうか？

だから、長い目で見ても For All Life である新たな業種の誕生に対して、For All Life 路線をとり Against All Life 路線をとらないでくださったこと――その新たな業種を一部の方々の目先の一時的な痛み回避だけのために、ボイコットしたり、阻止したりしないでくださったことに心底感謝するべきだろう。

同様に、新たな自然 (nature) のパズル解きという極上のエンター

テイメント、究極の再生可能エネルギーに基づく新たな技術についても、長い目で見ても For All Life であっても、一部の方々にとっては、短い目で見ても一時的な痛みをもたらす可能性がある。

それでも、もし、新たな自然 (nature) のパズル解きという極上のエンターテイメント、究極の再生可能エネルギーに基づく新たな技術に対し、長い目で見ても For All Life であることに気づき、For All Life 路線をとり Against All Life 路線をとらないでくださったなら―― 一部の方々の目先の一時的な痛み回避だけのために、ボイコットしたり、阻止したりしないでくださったなら、そのことにも心底感謝するべきだろう。

’20 初春 (26 年 6 ヶ月後)

もし、短い目で見ても一時的な痛みを抱えざるをえない方々も含め、誰もがみんな、長い目で見ても、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…で生きようになり、For All Life 路線を貫けるようになっていれば、いずれ、健やかな全人類レベルのライフが誕生するだろう。

こうして誕生する健やかな全人類レベルのライフは、健やかに“究極の再生可能エネルギー”を使える存在として、地球生態系のレベルのライフの『アタマ』の方向の存在として活躍しながら、将来、健やかに寿命を全うできるようになっているだろう。そうなっていれば、将来、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化も果たせ、ますます健やかに寿命を全うできるようになるだろう。

ここにたどり着ければ――

自然科学や科学技術の問題だけでなく、例えば、教育問題、医療

問題、経済問題、人口問題、農業問題、食糧問題、紛争問題…を含む、あらゆる人間社会の問題も、ほぼ必然的に根底から解消しているだろうし、近年の SDGs を含むさまざまな目標も、効果的に、健やかに達成されているだろう。

’20 初夏 (26 年 9 ヶ月後)

その日の晩、不思議な夢を見た。

「君が、これを考え出したのかい？」 教授は、ぷるぷる震えていた。

「——いいえ、ほとんど井束心笑君です」と僕。

「これだ！ これだよ！ 探し求めていたのはこれだ！

この成果は、物理学に豊かな成熟をもたらします。

この成果は、エネルギー分野にも豊かな成熟をもたらします。

この究極の再生可能エネルギーが健全に活用されれば、エネルギー問題だけでなく、環境問題、水問題、食糧問題も劇的に解消されます。

気候問題さえも、劇的に解消されるでしょう。

大きな争いの原因もなくなります。

人類にとって、いいことづくめです。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

私が、生きている間に、このような成果をまのあたりにできて——
— 私は幸せ者です。みんなも幸せ者です。

この成果は、間違いなく、長い目で見て全人類のためになる。

全人類を笑顔するために役立てることができる——」

おじいさんが笑っている。「うむ。大したもんじゃ」

ランベリーがしっぽを振っている。

心笑君が笑っている。「君の想いを込めて、それを世の中に広

めてみないかい？ 本という形で——」

「え？ 無理だよ。恥ずかしいし、目立ちたくないし、不安だし…」

「だったら、ペンネームにしようよ」と心笑君。

「ペンネーム？」

「そうだな。ペンネームは、“ココエ・サンポ” にしようか？」

「ココエ・サンポ？」

「そう。“ここへ散歩”という意味を持たせられるよ」

「待った、待った。ペンネームは、サンポ・ココエの方がいいんじゃない？ アイザック・ニュートンの名前やアルバート・アインシュタインの名前を見習えば、その方が、きっといいよ。君が先に見つけた成果だから」

「何言ってるんだい？ 君が先に見つけた成果だよ。

ココエ・サンポとなるべきさ」

「いや、ありえないよ。サンポ・ココエとなるべきさ。君が先さ」

「いや。君が先さ」

「いや。そんなことはないよ」

「そんなことはあるよ」

「ないない」

「あるある」

「——ってというか、そもそも、“ここへ散歩”や“散歩ここへ”よりも、“いつかここへ”や“いつも心笑”の方が、はるかに意義深いんじゃない？」 そもそも案を僕は示した。

“いつも心笑”で“いつかここへ”—— いいね♪」 心笑君の心笑。

パッと目を覚ました。しばらく、ベッドの上で思いめぐらせた。

・・・ いつも心笑で—— いつかここへ——。

For All Life の境地、いつもここにいればこそ、いつも心笑でい

られる。このおいしい知恵が広まり、みんなに共有されればこそ、健やかな全人類レベルのライフに至る境地、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を果たす境地へ、いつかたどり着ける。

——でも、恥ずかしいんじゃないか？ 不安じゃないか？

しかし—— いつかここへたどり着くために、誰かが、今すぐこれをやりとげなければならないんじゃないか？

——いや、いつかここへたどり着くために、僕は、今すぐこれをやりとげたいんだ！！！！ いつも心笑で、いつかここへ！！！！

イキイキしていよう。ウキウキしていよう。ワクワクしていよう。

まずは自分自身が For All Life の境地で心笑み続けよう。みんなが For All Life の境地で心笑んでいるのを想像しながら——。

’21 初秋 (28 年後)

結局、“S. ITSUMO COCOE” のペンネームで、親友からの手紙をメインコンテンツにするという形式で、心笑君に捧げる本として、成果を公表した。

’21 秋 (28 年 1 ヶ月後)

「ねえ」 瑠音が、ふいに不安げな声を上げたのは、本屋さんに向けて、ふたりで歩いているときだった。「あやしいよ。うしろの“犬を連れている、お年寄りの方”」

帽子をかぶってサングラスをかけているお年寄りの方が、犬を連れて 30m ほど後ろを歩いているのが見える——。

「どうして、そう思うんだい？」と僕。

「だって、さっきから、ずっと私たちのあとをついてきている気がするから——」

「——気のせいでないかい？ 僕には、全然あやしく見えないよ。目の不自由な方が盲導犬を連れているようにも見えるよ。

——きっと、たまたまだよ」

「そうかしら——」

「——じゃあ、試しに、次の交差点で右に曲がってみようか」

「そうね」

右に曲がってしばらく歩いて振り返ると、相手も右に曲がった。

「ほらほら」

「——じゃあ、今度は、左に曲がってみよう」

左に曲がってしばらく歩いて振り返ると、相手も左に曲がった。

「ほらほらほら！」

「ええ！？」

「ね？ そうでしょ？」

「私たち、尾行されているのかしら——」

「——なぜ、尾行！？」 そこで、僕は、念のため、ある提案をした。

「じゃあ、走ってみようか？」

「え？ ——そうね」

僕らは、走り始めた。

すると、なんと、その老人と犬も走り始めた。

「なんで！？」と僕の驚き。

「キャー！」と瑠音の叫び。

何で、むこうも走るんだ！？

「ハア、ハア、ハア、ハア…」 「ハア、ハア、ハア、ハア…」

何十メートル走っただろう？

しばらくすると、犬が解き放たれた。

！！！！

犬だけが猛スピードで、近づき始めた。

20m、15m、10m…

「キャー！！」 「うおー！」

！！！！

あまりの驚きのせいで足もとがもつれて、うまく走れなくなった。

と思ったら、僕だけ、そのまま地面に転がり、寝そべってしまった。

5m、3m、1m…

「イヤァァー！！」 「うおおー！！」

僕に飛びついた、その犬は——

僕の顔を、ペロペロと、なめ始めた。

よく見ると、ランプベリーだった。

「ランプベリー！」と僕。

「ランプベリー！？」と瑠音。

しばらくすると、お年寄りの方が、近くにたどり着いた。

帽子を取ってから、サングラスを取った。

岬のおじいさんだった。

「おじいちゃん！」

「おじいさま！」

「おう、応援しにきたぞ！ 久しぶりじゃのう。

——どうして、逃げるんじゃ？」

「っていうか—— まぎらわしいことしないでくれよ！！」

——パッと目を覚ました。しばらく呆然とした。

’21 冬 (28年3ヶ月)

公表した成果について、ほとんど反響がなかった。

たとえ瑠音だけは応援してくれていても、そのまま、みんなに忘れ去られてしまうだろうと思った。

’21 冬 (28年3ヶ月2週5日後)

年末年始の休暇中、一家で瑠音の実家に行った際、疲れがたまっていた僕は、妙に“ひとりになりたいな”という気持ちが高じ——気晴らしに散歩にでかける旨を瑠音に伝えて単独で出発した。

積雪の上を歩き続け、なぜか冬の岬の、あの昼寝ポイントにたどり着いた。

早々と日が暮れ始め、薄暗くなり始めている——。真冬の海原が重々しく広がっているのが見える——。雪が降り始めている——。

孤独を感じ、エネルギーを消耗しきったように感じた僕は、そのまま積雪の上で横になった。

雪の冷たさを感じながら、重苦しい雲を見上げた。

そのとき、猛烈な眠気に襲われた。

このまま眠ってしまおうか——。

僕は、ためらいながらも、とりあえず、そのまま目を閉じた。

——夢を見た。

冬の岬の昼寝ポイントで横になって目を閉じている自分——。

雪の冷たさを全身で感じている自分——。

かと思うと、ほっぺに、ペロペロのぬくもりを感じた。

「——」 ランプベリー——。 目が開かない。

「確かに休養は大事じゃが、今の、この状況では、休まない方がよいのではないじゃろうか？」

「——」 おじいちゃん——。 目が開かない。

「さんぽ君、起きて。起きるんだよ——」

「——」 心笑くん——。

「君は、決して一人じゃないよ。もちろん、僕らも応援しているけれど、そもそも、僕らの成果も、僕らが知らなかっただけのことで、どこかの先輩方が、とっくの昔に見つけていたことだったのかもしれないんだよ。地球文明の中の誰かって意味においても、地球外文明の中の誰かって意味においても——」

「——」 …… ——コンパースのこと？ 僕は目を開けた。

「それに—— そもそも、電荷エネルギーや磁極エネルギーだけが、究極の再生可能エネルギーなんじゃないんだよ」

「——」 ??? 目を丸くした僕。

「心のエネルギーも再生するんだよ。何度も何度も——」

「心のエネルギーも再生する——」

「そう。心のエネルギーは、超究極の再生可能エネルギーなんだよ。そのおかげで、僕は何度も何度も絶望を乗り越えることができていたんだ。そのときの希望の源の1つが、君であり、君らだった——」

「心笑君——」

「大丈夫。心は、超究極の再生可能エネルギーだから。

それは、僕が保証するよ。 ——というか、これは、まさに、君自身が、すでに示してくれていたことでもあったんだよ。

喜びが何十倍にも何百倍にも増幅できることは、心のエネルギーがくめどもくめども尽きない再生可能^{こころ}心エネルギーであることを示唆してくれていたのだから——」

「再生可能^{こころ}心エネルギー——」

「そう。君の自己実現は、この意味においても、僕の自己実現の支えであったんだよ。むかしからずっと——

だから、大丈夫。余裕さ。

——だから、今は、もう眠らないんだよ」 心笑君の笑み——。

「その通りじゃ」 なぜかサンタクロースの恰好をしているおじいさんの笑み——。トナカイのかぶり物をしている、しっぽを振りながら寄り添うランプベリーのぬくもり——。

——パッと目を覚ました。

しばらく杲然——。 気づいたら、自分も心笑んでいた。

——そうだ。

心笑君のおかげで—— 心笑君のためにも——

おじいちゃんのおかげで—— おじいちゃんのためにも——

ランプベリーのおかげで—— ランプベリーのためにも——

瑠音のおかげで—— 瑠音のためにも——

子どもたちのおかげで—— 子どもたちのためにも——

未来のみんなのおかげで—— 未来のみんなのためにも——

今のみんなのおかげで—— 今のみんなのためにも——

…

細胞社会レベルのライフのおかげで——

細胞社会レベルのライフのためにも——

人間社会レベルのライフのおかげで——

人間社会レベルのライフのためにも——

全人類レベルのライフのおかげで——

全人類レベルのライフのためにも——

天体生態系社会レベルのライフのおかげで——

天体生態系社会レベルのライフのためにも——

...

そうやって、心のエネルギーを再生させ、増幅させ続けるんだ。

エネルギーを奪うクヨクヨではなく、エネルギーを増やすワクワクの方こそを膨らませながら——。

ワクワクワクワク ♪ ワクワクワク ♪

ワクワクワクワク ワクワクワク ♪

「あそれ ♪

ワクワクワクワク ♪ ワクワクワク ♪

ワクワクワクワク ワクワクワク ♪

あそれ ♪

ワクワクワクワク ♪ ワクワクワク ♪

ワクワクワクワク ワクワクワク ♪」

——イキイキイキ ♪ イキイキイキ ♪

イキイキイキイキ イキイキイキ ♪

——アイアイアイ ♪ アイアイアイ ♪

アイアイアイアイ アイアイアイ ♪

——ランランラン ♪ ランランラン ♪

ランランランラン ランブベリー ♪

——ルンルンルン ♪ ルンルンルン ♪

ルンルンルンルン ルンルンルネ ♪

——ニコニコニコ ♪ ニコニコニコ ♪

ニコニコニコニコ ニコニココエ ♪

——サンサンサン ♪ サンサンサン ♪

サンサンサンサン サンサンクス ♪

——ルンルンルネ ♪ ルンルンルネ ♪

ルンルンルネサン ルネサンクス ♪

——ニコニココエ ♪ ニコニココエ ♪

ニココエサンクス ココエサンクス ♪

——ルネサンクス ♪ ルネサンクス ♪

ルネサンクスクス ルネサンクス ♪

——サンクスクス ♪ サンクスクス ♪

サンサンクスクス サンクスクス ♪

… ——おじいちゃん、どんなに苦しい中でも、ありがたさを見つけられるんだよね？ だから、どんなに苦しい中でも、笑ってられるんだよね？ 「——フフフッ。フフフッ。 アッハッハッ。アッハッハッ。アッハッハッハッハッハッ。アッハッハッハッハッハッ！」

何度だって心の元気を取り戻せる。

そこには、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、ニコニコ、心笑、喜び、快感、楽しみ…を含む『For』の再生や増幅がある。

イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、ニコニコ、心笑、喜び、快感、楽しみ…を含む心のエネルギーは、いくらでも増幅できるし、何度だって再生できる。

夢の中の心笑君が言っていたように、それらは、たとえ、どんなに絶望しても、何度も何度も再生できる超究極の再生可能エネルギー

一、再生可能^{こころ}心エネルギーでもあるから。

人間は、本来、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、ニコニコ、心笑、喜び、快感、楽しみ…にあふれている健やかな存在であるはずだ。だから、それは改心などではなく、心の再生だろう。

何度だって、Against All Life 路線を脱しながら、For All Life 路線をとり続けることができるし、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ、モンモン、ピリピリ、イライラ、ムカムカ…の苦しみライフを脱しながら、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、ニコニコ、アイアイ、ルンルン、ユウユウ…のお楽しみライフを育み直せるし、心の再生——心の回復、復旧、復興、全快…を実現できる。

この心の再生——心の回復、復旧、復興、全快…の実現が広がれば、人間レベルのライフの健康寿命が延びるだけでなく、人間社会レベルのライフの健康寿命も延びる。

この心の再生が広がり続けられれば、いずれ、健やかな全人類レベルのライフも誕生するし、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化も果たせる。

そうなれば、科学技術が健やかに十分に育ち、地球環境の持続、生態系の繁栄に貢献できるし、生態系からも重宝され続けるだろう。

だから、自身の心の再生——心の回復、復旧、復興、全快…の実現が最優先なのだろう。

心の再生が広まるには『For』の連鎖が広まることも大事だろう。

心の再生が広まるには、For All Life の知恵が広まること、For All Life の『コトバ』が広まることも大事だろう。

心の再生が広まるには、一人一人が、フルーツフルで健やかな自己実現 For All Life を果たし続けることも大事だろう。

心の再生が広まるには、『イマ』と『ミライ』の両方の方々が愛し

合うこと、For All Life 路線を高め合うことも大事だろう。

心の再生が広まるには、『アタマ』と『カラダ』の両方の方々が愛し合うこと、For All Life 路線を高め合うことも大事だろう。人間レベルのライフにおいても、人間社会レベルのライフにおいても、将来の健やかな全人類レベルのライフにおいても…。

…

心の再生が広まれば、たとえ一人一人のエネルギーは小さくても、トータルで大きなエネルギーになるだろう。

心の再生が広まれば、たとえ一人一人が微力であっても、トータルで大きな力になるだろう。

この大きな力こそが、全人類レベルのライフにおける自然治癒力の根幹だろう。

この自然治癒力が大きくなれば、ますます心の再生が広まり——心の再生が広まれば、ますます自然治癒力が大きくなるだろう。

それらの力が十分に育てば、全人類レベルのライフは健康を獲得でき、健やかな全人類レベルのライフが誕生するし、いつしか健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を果たせるんだ。

全人類レベルのライフは、いつかここへ、たどり着けるんだ。

…

ああ、たまらんぜ。

ああ、お楽しみ袋がふくらむぜ。

…

そのためにも、まずは、自分自身が好き、楽しみ、心笑…を取り戻し、エンジョイし続けよう。周囲のみんなも喜ばせ、楽しませながら——。 For All Life 路線を貫きながら——。

そうして、まず自分自身が、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ、モ

ンモン、ピリピリ、イライラ、ムカムカ…を脱し続け、ウキウキ、イキイキ、ワクワク、ホワホワ、ニコニコ、アイアイ、ルンルン、ユウユウ…へと舵をとり続けよう。

何度も、何度も、何度も…。

そうしながら、日々、自身の心の再生——心の回復、復旧、復興、全快…を繰り返し実現し続けよう。

何度も、何度も…。どんなに絶望しても。何度絶望しても。…

心は、超究極の再生可能エネルギーだから。

——そうだね？ 心笑君。

——そうだね？ おじいちゃん。

——そうだね？ ランプベリー。

——そうだね？ 瑠音。

——そうだね？ みんな。

…

気づけ！ 気づけ！ 気づけ！

広まれ！ 広まれ！ 広まれ！

いつまでも、いつまでも、いつまでも！

どこまでも、どこまでも、どこまでも！

ブリーズ、ブリーズ、ブリーズ！

…

いつしか雪の勢いが増していた。——早く帰らなきゃ。

よろよろと立ち上がった。すると、「あなた！」大きな声が響いた。見ると、懐中電灯を持っている瑠音がそこに立っていた。

「よかった——」 瑠音の声は、ふるえていた。ぼろぼろと涙をこぼし続けている瑠音。僕は、駆け寄ると、思わず抱きしめた。

「ごめん。死んじゃったと思ったかい？」

「だって—— だって—— こんなに寒い中、眠ったりしたら——」

「考えごとをしていたんだよ。確かに最初は眠ってしまつて夢を見たけれど、途中から、ずっと考えごとをしていたんだ。おかげで」

「バカ、バカ、バカ——」 瑠音は、僕の胴体を、両手でポンポンたたいた—— あとに抱きしめた。

「——ありがとう。ありがとう。ありがとう。——愛してる。愛してる。愛してる」 僕は、より強く抱きしめた。

’21 冬 (28年3ヶ月2週6日後)

その翌日は、お昼頃まで、実家のベッドの上で横になっていた。

ふいに、フワリフワリと浮かぶコンパースの存在に気づいた。

「お久しぶりで、ございますう♪」 コンパースの第一声。

「おお、久しぶり——」

「一緒に、はるかなる旅にでかけませんかあ〜♪」

「はるかなる旅？——」

「そうですともお♪」 コンパースは、ひとまわり拡大して、僕がその上に乗るのを促した。

僕は、この際どうにでもなれと半ばやけくそで、素直にコンパースの上に四つん這いになった。

「しっかりつかまっているのでございますよお♪」 そう言うや否や、開いている窓から飛び出した。

「う〜、わっ！！」

音楽イン♪ Soaring Up Into The Sky 途中から

家の外に出たコンパスは、まもなく、上へ上へと上昇し始めた。

家が遠ざかる、公園も遠ざかる、森も遠ざかる、川も遠ざかる、砂浜も、岬も、海も、大地も、雲々も、大洋も…遠ざかる。

さすがに不安になってきた。もし、ここから落ちたりしたら…

「いったい、いつまで昇り続けるんだい？ ——大丈夫？」

「大丈夫でございますよお♪」 さらに遠ざかり続けるコンパス。

地球の丸みがどんどん増し続け、とうとう、まん丸い、青くて白い地球全体が視覚に入った。

太陽を背にして見える、青く白い地球——。

息をのむような美しさだった。

音楽フェード・アウト♪ Soaring Up Into The Sky

体重が感じられなくなり、体がフワリフワリしている——。コンパスとほぼ接せずとも、落下する不安はすっかり消え失せていた。

「——あれ、空気は？ 僕の呼吸は？」

「大丈夫でございますよお♪」

「私もいるからよ♪」 コンパリーチェの登場。合計2枚。

「リーナもいるからね♪」 元コンパルンクルの登場。合計3枚。

「拙者もいるからでござす」 元コンパランクルの登場。合計4枚。

「私もいますからね♪」 元コンパリンクルの登場。合計5枚。

「オレもいるじゃーい♪」 元コンパロンクルの登場。合計6枚。

「私もいますよ♪」 元コンパレンクルの登場。合計7枚。

7枚のペーパーコンパスが登場したかと思うとみんなが互いに部分的に重ね合わさり、僕を美しい^{まゆ}繭のように包み込んだ。その中で呼吸できると安心したのもつかのま、それらは、透明になった。

——すると、僕の衣服も身体もすべてが透明になった。 ???

地球のはるか上空で呆然としていると——

「はるかなる旅は、ここから始まるのですう〜♪」 コンパスが声を響かせた。

音楽イン♪ Soaring Up Into The Sky 途中から

「ええ！？」 僕の声も響いた。

さらに遠ざかると、太陽光に照らされている月が見えてきた。

地球と月と太陽から遠ざかり続けると、ほかの惑星たちも見えてきて、太陽系全体が視界に入った。

「太陽系だ——」 思わず、つぶやいた。

さらに太陽系から遠ざかると、太陽系が1つの輝く点として見えるほどになった。

さらに遠ざかると、別の光る恒星がいくつか目に入った。

この1つ1つの輝く点が、それぞれに、いくつかの惑星を抱えているのだろう。太陽系のように——。

さらに遠ざかり続けると、どれが太陽系か全く見分けがつかなくなるほどの無数の輝く恒星が目に入るようになった。

「天の川——」

さらに遠ざかると、銀河系全体が渦を巻いているのが見えた。

「すげえ。銀河系の渦だ——」

これらの無数の輝く星々の中で、たった1つが太陽系なのかあ。

さらに遠ざかり続けると、となりのアンドロメダ銀河が見えた。

かと思うと、複数の銀河の群れ——局所銀河群が見えた。

さらに遠ざかり続けると、無数の銀河郡の集まり——超銀河団が見えた。

このとき、銀河系は、すでに1つの輝く点に見えるほどになっており、どれが銀河系か見分けがつかなくなっていた。

「すごすぎる——」 この無数の輝く点々の1つ1つが銀河系に匹敵する存在なのかあ。 …

さらに遠ざかり続けると、巨大な泡のような宇宙の大規模構造が見えてきた。

さらに遠ざかり続けると、とうとう宇宙の大規模構造さえ小さな1つの輝く点に見えるほどの辺境の地、宇宙の果ての果ての果てまでたどり着いた。

音楽フェード・アウト♪ Soaring Up Into The Sky

その唯一の輝く点以外は、すべてが真っ暗闇だった。

「コンパース——」

「なんでございましょうか♪」

「さすがに遠ざかりすぎじゃない？ もし、このまま遠ざかり続け、あの輝きが見えなくなったら、一体どうなるの？」

「そうでございますねえ♪ あらゆる方向がすべて、完全に真っ暗闇になってしまうのでございますう♪」

「完全に真っ暗闇？ そうなったら、どうなるの？」

「帰れなくなってしまうのですう♪」

「——ええ！？」 …… 「帰れなくなったらどうなるの？♪」

「われわれは、永久に、この真っ暗闇の中で漂い続けるのですう♪」

自由空間は果てしく広がり、自由時間も限りなく延びるのでございますう♪ 実際、時間の流れが永遠に止まってしまったかのようになってしまうのですう♪」

「暇で暇でしかたなくなってしまうじゃん」 …… 「——だった

ら、あの輝きは絶対に見失っちゃダメじゃん」

「その通りなのでございますう♪ です、今のところ、あの輝きが見える範囲にとどまり続けているのでございますう♪」

「今のところ？」

「もし、あなた様が、お望みになるのならば、見失うこともできるのでございますよお♪」

「そんな——。そんなこと、望むわけじゃないじゃん——」

何なんだろう、この気持ち——。このモヤモヤした気持ち——。

しばらくの間、このモヤモヤした気持ちを整理してみた。

はるか彼方の、あの輝きの一点の中の奥の奥の、さらなる奥の中にある銀河系の渦の中のごく一点である太陽系の中の地球上で、僕は暮らしていた。

さんざん、失敗して、イヤな思いをして、恥ずかしい思いして、傷ついて、つらくなって、悲しくなって、せつなくなって…。

ところが、今は、そんなしんどさが皆無な、はるか彼方の辺境の場で、限らない自由空間と、限らない自由時間を手に入れることができそうになっている。

いっそのこと、何もかも、あらゆるしがらみから解放されて、このままとどまり続けてしまおうか？

永遠の時間の中で——。どこまでも果てしない空間の中で——。

限らない自由の中で——。

——いや、待てよ。

退屈で退屈でしかたない暇あふれる永遠の自由時間に意味や価値があるのだろうか？

——そうすると、“有限の自由時間”と引き換えに、僕らは、飽きることのない地球で生きていたってことなのだろうか？

バラエティに富んでいる楽しみにも満ちている地球で——。

さまざまな喜びにもあふれている地球で——。

いろいろな輝きにもあふれている地球で——。

… ——丸みを帯びた地球の輝き、瑠音と見た海面の輝き、ランプベリーと見た川面の輝き、おじいさんの相棒であった丸い石“アインシュタイン”の輝き…が心に浮かんだ。

どれくらいの時間が経ったのだろう。コンパースが口を開いた。

「これから、どこへ行きたいでしょうかあ？」

「え？ ——って、どこへも行けるの？」

「どの銀河団へも、どの銀河へも、どの恒星系へも、どの惑星へも…どこへも自由に行けるのですう♪

好きに選ぶことができるのでございますよお♪

地球より、はるかに平和で住みやすい快適な惑星、地球より、はるかに大勢の、心健やかな仲間が住んでいる場所が、無数にあるのでございますよお♪」

「無数に——」・・・

「その中の1つで暮らせば、地球で暮らすより、はるかに快適に」

「地球へ帰りたい。——地球へ帰郷したい」

「なぜなのでございましょうかあ～♪」

「地球がわが家だから。地球がマイホームプラネットだからだよ。

故郷の地球で生きている大好きな家族——僕の小さな家族はもちろん、地球というでっかな家で暮らす大きな1つの家族と一緒に、

地球を、宇宙一健やかに暮らせる、宇宙一快適な場所にしたいから。みんな一緒に力を合わせて、健やかな全人類レベルのライフを誕生させながら——。健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を果たしながら——。そうやって、何億倍も何兆倍も、うれしさを感じながら——」

「——ほういほういほうい～♪ かしこまりましたですう～♪」

それから、逆向きのズームインする旅、帰郷の旅が始まった。

母なる宇宙の大規模構造。

母なる超銀河団。

母なる局所銀河群。

母なる銀河系の渦。

母なる太陽系。

母なる地球。

太陽を背にフワフワ浮かびながら、白と青に包まれた美しい地球、マイホームプラネット全体を眺められるポイントにたどり着いた。

コンパースらは、ここで、しばらく静止した。

すると、いつしか、身体も衣服も、色を取り戻した。

コンパースたちも、いつしか色を取り戻し、繭の形を解いて、7枚に分離し、それぞれ自由になった。

「ただいまですう～♪」「ただいまあ～♪」「ただいまだね♪」

「ただいまでござす」「ただいまですね♪」「ただいまだじゃーい♪」

「ただいまですよ♪」

それから、7枚は完全に重ね合わさり1枚になった。僕が、その上に四つん這いになると、「それでは、参るでございますう～♪」

コンパスは、下へ下へと、ゆっくりゆっくり降下し始めた。

かつての悪夢とは対照的に——。 ああ、いい夢だなあ。

“ココエのりんご”の新たな実証実験をしているかのように——。

雲、海、陸地… 岬、砂浜、森、川、公園、家々… そして、ついに実家、自分の部屋へと帰ってきた。——そこで、コンパスから降り、あいさつを交すと、そのままベッドの上に静かに横たわった。

——かと思うと目覚めた。コンパスは、どこにもいなかった。

しばらく呆然とした。

どこまでが現実で、どこまでが夢なのか、そんなことは、もう、どうでもよくなっていた。

夢であろうと、想像であろうと、思考であろうと、空想であろうと、ファンタジーであろうと… ——何であろうとも、『アタマ』の方向にあるはずの“それ”から何かを学べることは確かだろう。

“それ”が何であろうが、もう関係ない。

広い広い宇宙の中に、せまいせまい地球が存在していること——。

長い長い宇宙の時間の流れにおいて、短い短い一人一人の人間の一生、それこそ“たまゆら”な一生が繰り返されていること——。

これらは、ゆるぎない事実だ。

広大な宇宙空間にある、狭小なオアシスである地球を、互いに争い続ける場として浪費することが、どんなに愚かなことか——。

悠久の宇宙時間における、せっかくの一瞬のきらめきである一生を、互いに争い続ける機会として浪費することが、どんなにバカげたことであるか——。

せっかくの、ありがたい、この地球における空間と時間を、悲し

み、苦しみ、不快さ…のためだけに浪費するなんて——

もったいない。もったいなさすぎるよ。 …

どうせなら、喜びや楽しみ、心地よさや快感…が、何十倍何百倍、いや、何千倍何万倍、何億倍何兆倍…にも増幅することのためにこそ—— このかけがえのない地球における空間と時間を使いたいよ。

Against All Life 路線を脱して、For All Life 路線を買っていたいよ。だれもが、Against All Life 路線を脱して、For All Life 路線こそを買っていてほしいよ。

For All Life の境地、いつもここから始めていれば、社会人のときの心笑君のように、いつも心笑をたたえ続けられる。

For All Life の境地が広まり続ければ、健やかな全人類レベルのライフが誕生し、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化が果たされる境地へ、いつかここへ地球人類もたどり着つける。

音楽イン♪いつかここへ Someday Here

いつもここから、いつも心笑！

いつもここから、いつも心笑！

いつもここから、いつも心笑！

いつもここから！

いつも心笑！

いつもここから！

いつも心笑！

いつもここから！ いつも心笑！

いつも心笑をたたえられる、For All Life の境地が広まり続ければ、

病んでいる者へも 健やかなる者へも

未熟な者へも 成熟している者へも

心貧しき者へも 心豊かな者へも

持たざる者へも 持っている者へも

男性へも 女性へも

子どもたちへも 大人たちへも お年寄りたちへも

苦労多き者へも 安らぎ多き者へも

悲しみ多き者へも 楽しみ多き者へも

悲観的な者へも 楽観的な者へも

えらくない者へも えらい者へも

アマチュアな者へも プロフェッショナルな者へも

フォロワー的な者へも リーダー的な者へも

『カラダ』的な者へも 『アタマ』的な者へも

『イマ』を生きている者へも

『ミライ』を生きる者へも 『カコ』を生きた者へも

...

いつも心笑をたたえられる、For All Life の境地が広まり続ければ、

いつか、健やかな全人類レベルのライフが誕生する境地——

いつか、健やかな天体生態系社会のライフの一員化を果たす境地

—— いつかここへ、たどり着けるんだ。

いつもニコニコ心笑を生む、For All Life の境地が広まり続ければ、
みんなに共有され続けられ—— いつかここへたどり着けるんだ。

For All Life の境地が広まり続けて
健やかな全人類レベルのライフへ！

For All Life の境地が広まり続けて、健やかな
天体生態系社会レベルのライフの一員化へ！

For All Life の境地が広まり続けて、
いつかここへ！

いつも心笑が広まり続けて、いつかここへ！

For All Life！ いつもここから！ いつも心笑！
みんなに広まり続け！ いつかここへ！

For All Life！ いつもここから！ いつも心笑！
みんなに広まり続け！ いつかここへ！

For All Life！ いつもここから！ いつも心笑！
みんなに広まり続け！ いつかここへ！

...

音楽終了♪いつかここへ Someday Here

それから何年も後の初夏(1)(何十年も後)

帰郷の際の散歩がてら、あの地球のかすかな丸みがわかる岬に久々に一人で来ていた。座りながら思った。僕は、地球人だ——。

いや、それだけでない。僕は、宇宙人でもある——。

「わしゃあ、宇宙人じゃからのお」 おじいちゃんは、そうとも話していたっけ——。

もちろん、“地球人だからいい”とか“宇宙人だからいい”とも、逆に、“地球人だからわるい”とか“宇宙人だからわるい”とも、そう単純には言えないだろう。

そうだ。一般に、“○○人だからいい”とも、“○○人だからわるい”とも、そう単純には、本来、決して言えないはずなのだ。

宇宙人や地球人を含む、あらゆる○○人は、○○人 For All Life であり続ければこそ、よき存在なのだ。なぜなら、For All Life の境地であり続ければこそ、あらゆる存在は、愛し合い続けながら感謝し合い続けながら共に繁栄しながら共に存続し合えるのだから。

逆に、○○人 Against All Life であり続ければ、宇宙人や地球人を含めて、あらゆる○○人は、あしき存在なのだ。Against All Life の境地であり続ければ、あらゆる存在は、憎み合い続けながら攻撃し合い続けながら、いずれ共に衰退しながら共に滅亡し合ってしまうのだから。

それは、単に人というだけでない。人の『コトバ』の側面も、コトバ For All Life であり続ければこそ、よき存在なのだ。人の『カタチ』の側面、『アタマ』の側面、『カラダ』の側面も、それぞれ、カタチ For All Life、アタマ For All Life、カラダ For All Life であり続ければこそ、よき存在なのだ。なぜなら、For All Life の境地

であり続ければこそ、あらゆる存在は、愛し合い続けながら感謝し合い続けながら長く共存し合えるのだから。

これらのことは、この宇宙の中の、あらゆる存在について、これまで例外なくあてはまってきた普遍的な事実だろう。また、これらのことは、この宇宙の中、あらゆる存在について、これからも例外なくあてはまってゆく普遍的な分岐点でもあるだろう。

For All Life の境地で健やかに生きる地球人 For All Life ならば、マイホームプラネット——地球という1つの家に暮らす、1つの家族のメンバーであると言えるだろう。

つまり、この場合、地球という名の^{ホームプラネット}家天体で暮らしている健やかな地球人類は、もはや、1つの家族なのだろう。

地球という^{ホームプラネット}家天体で暮らすメンバーが家族でありうるくらいならば、ふつうの家で暮らす、核家族、3世代家族…のメンバーが家族であるだけでなく、学校や会社という名の^{ホーム}家で暮らすメンバーも家族、市区町村という名の^{ホーム}家で暮らすメンバーも家族、都道府県という名の^{ホーム}家で暮らすメンバーも家族、国家という名の^{ホーム}家で暮らすメンバーも家族、ヨーロッパ、アメリカ、アジア、アフリカ…などの、それぞれの大陸や地域や島々という名の^{ホーム}家で暮らすメンバーも家族ということがありうるのではないか？

そりゃ、ふつうの家族の中においてさえも、ときに、すれ違いや誤解、勘違いなどから、一時的にケンカ状態になることもあるかもしれない。それでも、家族であればこそ、話し合ったり、謝り合ったりして、許し合ったり、忘れ合ったり、軌道修正し合ったり、路線変更し合ったり、境地を変え合ったりして、仲良し状態に戻れて、長い目でみて、健やかに存続し続けられるのではないのではないか？

それは、人体という名の家——^{ホームヒューマンボディー}家人体で暮らしている、細胞、

組織、臓器、器官系で暮らす細胞社会のメンバーが、1つの家族であればこそ、健やかに存続できることと同じではないか？

健やかな存続のためには、となりの人どうしが愛し合って、1つの家ホームが生まれることだけでなく、次のことも大事になるだろう。

となりの細胞どうしが愛し合って、1つの家ホームが生まれること、
 となりの組織どうしが愛し合って、1つの家ホームが生まれること、
 となりの臓器どうしが愛し合って、1つの家ホームが生まれること、
 となりの器官系どうしが愛し合って、1つの家ホームが生まれること、
 となりの学校どうしが愛し合って、1つの家ホームが生まれること、
 となりの会社どうしが愛し合って、1つの家ホームが生まれること、
 となりの町どうしが愛し合って、1つの家ホームが生まれること、
 となりの村どうしが愛し合って、1つの家ホームが生まれること、
 となりの市どうしが愛し合って、1つの家ホームが生まれること、
 となりの都道府県どうしが愛し合って、1つの家ホームが生まれること、
 となりの国どうしが愛し合って、1つの家ホームが生まれること、
 となりの島どうしが愛し合って、1つの家ホームが生まれること、
 となりの地域どうしが愛し合って、1つの家ホームが生まれること、
 となりの大陸どうしが愛し合って、1つの家ホームが生まれること、
 となりの天体どうしが愛し合って、1つの家ホームが生まれること、
 となりの星どうしが愛し合って、1つの家ホームが生まれること、
 となりの銀河どうしが愛し合って、1つの家ホームが生まれること…
 “となり”も、“家”も、“家族”も、狭い意味から広い意味まで、対象範囲が広がることが、せまい愛から広い愛へと愛が広がること、つまりは、For All Life 路線そのものに対応しているだろう。

もちろん、だれかと愛し合うためには、まず、自分が自分自身を愛することが不可欠だ。

でも、もし自分自身だけを愛し続けるならば、拙く幼く危険だ。

自分自身だけでなく、自分の周囲をも愛すること、その愛を広めることが、成熟であり、お互いの健やかな存続に必要な不可欠なのだ。

同様に、例えば、自分の国だけ、あるいは、自分の民族だけを愛し続けるならば、拙く幼く危険だ。自国だけでなく、自民族だけでなく、自分の周囲の国や、周囲の民族をも愛すること、その愛を広めることが、成熟であり、お互いの健やかな存続に必要なのだ。

今、地球では、さまざまな国や民族に分かれていて、さまざまな〇〇人が、互いに争い合っているけれど、将来、国や民族を超えた1つの家ホームへととまり、地球人として、地球内で争い合うことがなくなり、地球内で平和を保ちながら、健やかに長く存続していけるかどうかの分岐点は、それぞれが愛を広げ、互いに愛し合えるかどうか、つまりは、For All Life 路線を貫けるかどうかだろう。この分岐点は、まさに健やかな全人類レベルのライフが誕生できるかどうかの分岐点でもある。

それは人体とも相似であるという意味でも一理あるだろう。

細胞、組織、臓器、器官系の区域に分かれている人体には、それぞれの区域の存在が最大限に尊重されながらも、互いに愛し合って1つの家ホームへとまとまっているおかげで、人体内で争うこともなく、人体内での平和、人体の健やかさを保っているという一面がある。これがうまくいっているのは、各種の器官系、臓器、組織、細胞がFor All Life の境地であり続けているおかげだ。

その意味では、かつて、核戦争を防ぐために国を超えた政府が必要だとアインシュタインが考えていたことにも一理あることになるだろう。人体——人間レベルのライフの『アタマ』の方向の脳神経系に相当するような、全人類レベルのライフの『アタマ』の方向の

存在としての超国政府 For All Life なら、おおいに歓迎されるべきだろう。

例えば、もし地球超国政府 For All Life のような存在が誕生し、あらゆる国々が愛し合いながら1つの家^{ホーム}としてまとまったなら、その暁には、さまざまな地球内戦が消失し、地球平和が訪れているだろう。その土台の上で、地球上で自然科学も十分に発達できて究極の再生可能エネルギーも健やかにフル活用されるだろう。そうなれば、地球全体が“1つの家族のための1つの楽園”になるのも夢じゃなくなるだろう。

それは、もしかすれば、ほかの天体においても同じだろう。

例えば、火星超国政府 For All Life、水星超国政府 For All Life、金星超国政府 For All Life…とか？ おかげで、ほかの天体においても、1つの家^{ホーム}としてまとまれて、内戦もなく平和だろうし、その土台の上で、それぞれ場で、自然科学も十分に発達できて究極の再生可能エネルギーも健やかにフル活用されるだろうし、それらの天体全体が“1つの家族のための1つの楽園”になるのも夢じゃないだろう。

天体と人体が相似だから—— あらゆる人体どうしが愛し合えるように、あらゆる天体どうしが愛し合えれば、例えば、太陽系超惑星政府 For All Life を含む、さまざまな超惑星政府 For All Life とか、さらには、超恒星系政府 For All Life とか、超銀河政府 For All Life とか…が誕生できて、おかげで、あらゆる天体を含むこの宇宙は、1つの家^{ホーム}としてまとまれ、内戦もなく平和だろうし、その土台の上で、それぞれ場で、自然科学も十分に発達できて究極の再生可能エネルギーも健やかにフル活用されるだろう。そうなれば、宇

宙のあらゆる場所が“1つの家族のための1つの楽園”になるのも夢じゃないだろう。

それから何年も後の初夏(2) (何十年も後)

そういえば、コンパースは、この宇宙に無数に仲間がいるようなことも話していたっけ——。

——これって、宇宙にすでに無数に人類がいることを意味しているのだろうか？ もし本当にそうだとすれば、いろいろ、わかってくることがある——。

1つは、そもそも、何十億年もかけて、単純な物質→生体高分子→生体高分子社会→細胞→細胞社会→個体→個体社会→人間→人間社会…のような過程を経て、ある天体の中だけで人類が誕生したという説明は、宇宙で一番初めに誕生した人類だけに適用されるべき、ごくごく例外的な説明にすぎないはずだってことだ。つまりは、例えば、地球人が100%地球の中だけで原始生命からコツコツと誕生したという説明、この地球人類が宇宙で一番初めに誕生した人類であるという説明には無理があって、その説明は非現実的であるってことだ。なぜなら、今、地球上に何十億人もいる中で、ある一人が100%原始生命からコツコツと誕生したという説明、ある一人が地球で一番初めに誕生した人間であるという説明に無理があって、その説明が非現実であるのと同じことになるのだから——。

もう1つは、地球人類も親人類を含む多くの方々の力添えのおかげで誕生して育っているという説明の方が、無理がなく、現実的であるってことだ。なぜなら、地球上の各人間が親を含む多くの方々の力添えのおかげで誕生して育っているという説明の方が、無理が

なく、現実的であるのと同じことになるのだから——。

——いや、もしかしたら、実は、地球人類は、まだ、赤ちゃんとして誕生さえしていなくて、子宮の中で生まれている胎児の状態にすぎない？ 健やかな全人類レベルのライフとして誕生していない限り、地球人類は、流産するか、無事に誕生するかの瀬戸際に立ち続けているにすぎない？ だとすれば、親人類を含む多くの方々は、今にも、地球という名の子宮の中で、無事に育ってくれることを望み続けてくれている？ 今まさに、命懸けで誕生させんことを覚悟してくれている？

そうすると、この宇宙の豊かな恵みを受けて愛されながら健やかな全人類レベルのライフとして誕生することが、本物の宇宙デビューを意味している？ この地球の豊かな恵みを受けて愛されながら健やかな人間レベルのライフとして誕生することが、本物の地球デビューを意味しているように——。 …

いずれにせよ、もし宇宙に本当にすでに無数に人類がいるのならば、この地球で人間社会レベルによって多様な新たな人間が誕生し続けているのと同じように、この宇宙で天体生態系社会レベルによって多様な新たな人類が誕生し続けているのは確かだろう。

だから、もし宇宙に本当にすでに無数に人類がいるのならば、その大部分は…先祖人類→親人類→人類→子人類→子孫人類→…の積み重ねの結果のおかげの存在だろう。地球上の何十億人もの人間の大部分が…先祖人間→親人間→人間→子人間→子孫人間→…の積み重ねの結果のおかげの存在であるのと同じように——。

…

本当に、この宇宙に、すでに無数に人類がいるのだろうか？

それとも、そうではなく、地球人類は、宇宙で一番初めに誕生し

た、あるいは、誕生しようとしている、唯一の人類なのだろうか？

いずれにしても、誕生した赤ちゃんが成長し、成熟し、将来、ときに新たな赤ちゃんを誕生させて親となりうるように、誕生し、成長し、成熟した地球人類は、将来、ときに赤ちゃん人類を誕生させて親人類となりうるだろう。

また、いずれにしても、将来、別の天体に新たな人類を健やかに育むためにも、健やかに寿命を全うするためにも、健やかな全人類レベルのライフの誕生のためにも、健やかな天体生態系社会のライフの一員化のためにも、For All Life 路線を貫くこと、For All Life の境地であり続けることが大事であるのは変わらないだろう。

また、いずれにしても、誕生したこと、あるいは、誕生しつつあることが非常にありがたいことは、変わらないだろう。

その恵みに、その幸運に、心から感謝し続けたいよ。

それが、どんなに、ありがたいことか——。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

…

——ああ、なんだか少し眠たくなってきたかも。

それから何年も後の初夏(3)(何十年も後)

そう言えば、夢の中のランプベリー、おじいちゃん、心笑君は、生きているように感じられていたっけ——。

これらの夢の中の存在は、さすがに僕自身の『アタマ』の所産だろう。——それとも、みんな、それぞれの魂^{たましい}とかと関連している？

いずれにしても、少なくとも、身体や物体が『カラダ』の方向にあるとすれば、夢と同様に、魂^{たましい}は『アタマ』の方向にあるだろう。

もしかしたら、『アタマ』の中の『タマ』は、“たましい”の中の“たま”と同じ起源を持っていたりする？

同じように、言^{こと}霊^{だま}や御^み霊^{たま}の中の“たま”も『アタマ』の中の『タマ』と同じ起源を持っていたりする？

だとすれば、『アタマ』は、どんな“たま”なのだろう？

そう言えば、おじいちゃんの形見“アインシュタイン”も、玉^{たま}だった。って、それは、たまたま？ っていうか形^{かた}霊^{だま}を意味していた？

それとも、結局、あらゆる“たま”は、『アタマ』の働きの所産の一部に過ぎない？ 『タマ』が『アタマ』の一部であるように——。

というか、そもそも、“たましい”や“れい”を含む、あらゆる“たま”は、ある意味、『アタマ』の中の『アタマ』ではないか？

思考のあり方、知識のあり方、感情のあり方、行動のあり方、考え方、知り方、感じ方、動かし方、頭のあり方、身体のあり方、心のあり方… つまり、人間のあり方を、意のままに決める存在という意味の要^{かなめ}の中の要^{かなめ}——。

だから、“たましい”の中の“い”も“れい”の中の“い”も、実は、その本質は、“意”なんじゃないか？

だから、“たましい”や“れい”は、意識、意志、意欲、意思、意

図、意向、意見、意味、本意…を含む、あらゆる“意”を担っており、いずれも、知や情のあり方、頭や心身のあり方、人間のあり方を決めている存在という意味の要^{かなめ}中の要^{かなめ}、『アタマ』の中の『アタマ』であり、つまりは人間レベルの3ステップの一部なんじゃないか？

——もし人間のあり方を決める3ステップの一部が“人間霊”であるならば、植物や動物のあり方を決める3ステップの一部としての“植物霊”や“動物霊”、物質や宇宙のあり方を決める3ステップの一部としての“物質霊”や“宇宙霊”もありってことになる？

人間の“たましい”や“れい”は、“死後も生き残る”と言っている方もいるけれど、本当だろうか？

それが本当であろうとなかろうと関係ない。知や情、頭や心身のあり方を意のままに決めることを通じて、人間として現実に対して働きかけられる“今、生きている”という、この状態が、どんなに特別で、どんなにありがたくて、どんなに貴重であるか——。

この“たましい”や“れい”を含む“意”の力で、意のままに、頭や心身のあり方を決められるからこそ、Against All Life → For All Lifeのような健やかな成熟が実現できるのだろう。

いずれにしても、結局は、For All Life 路線を貫くこと、For All Life の境地であり続けることが大事であるのは変わらないだろう。

それらは、すでに亡くなられた方々のためにもなるだろう。

・・・ ——いや、ちがう？

すでに亡くなられた方々は、死んでしまった自身のためはいいから、今の方々が生きるため、未来の方々が生きるために、今の方々に生きてほしがっている？ そうやって、ライフをリレーし続けてほしがっている？

いずれにしても、過去のすべての方々のライフのおかげ、今のすべての方々のライフのおかげで、なおかつ、今のすべての方々のライフのため、未来のすべての方々のライフのために—— その意味を込めて For All Life 路線を貫くこと、For All Life の境地であり続けることも、健やかな全人類レベルのライフの誕生のため、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化のために役立つだろう。

また、いずれにしても、この人間社会、人類が誕生し、今生きているのは、すでに亡くなられてしまった多くの方々が For All Life 路線を貫き、For All Life の境地であり続けていてくださったおかげでもあるはずだ。

やっぱり、心から感謝したいよ。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

...

そして、やっぱり——

For All Life！ いつも心笑！ いつかここへ！

For All Life！ いつも心笑！ いつかここへ！

For All Life！ いつも心笑！ いつかここへ！

...

——ああ、すっかり眠たくなってきたよ。

いったん、お昼寝でもしようか。おじいちゃんのように——

横になった。でっかな青空が広がっている。白い雲が浮かんでいる。さわやかな潮風が全身をなでている。

それから目を閉じた。

ゆっくり、ゆったり深呼吸しながら——

お心笑しながら—— かつてのおじいちゃんのように——。

まどろみの中で、替え歌を作っちゃったりもしながら——。

作曲 初果ひるね 作詩 おじいちゃんひるねさんぽ——。

タイトル『Joy of Life』 ——『生歓喜』？

ドコドコドコトバ♪ ココココココロ♪ イマイマイアタマ♪

ポカポカポカラダ♪ イキイキイキモチ♪

ありがたいやき♪ おめでたいやき♪ ここえみたいやき♪

アイアイアイデア♪ ワクワクワクフウ♪ ニコニコニコエ♪

ポカポカポカラダ♪ イキイキイキモチ♪

ありがたいやき♪ おめでたいやき♪ ここえみたいやき♪

いつも、ここから♪ いつか、ここへ♪ ついに、ここに♪

ありがたいやき♪ おめでたいやき♪ ここえみたいやき♪

For All Life♪

All Life Forever♪ All Life Forever♪

ピピピーピピー♪

All Life For♪

All Life Forever♪ All Life Forever♪

ピピピーピピー♪

アイアイ、アイアイアイ♪ ワクワク、ワクワクワク♪

イキイキ、イキイキイキ♪ ニコニコ、ニコニコニコエ♪

ルンルン、ルンルンルネ♪ サンサン、サンサンサンクス♪

For All Life♪ All Life Forever♪

...

ミライのいつか

健やかな全人類レベルのライフが誕生してから、ずいぶん長い時間が経過している。

協力関係、シナジー関係、『Love - Love の関係』…が増え続け、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員となり、本物の平和が訪れてから久しくなっている。

健やかさ——楽しみ、ユーモア、恵み、心笑、イキイキ、ニコニコ、ワクワク…を増やし続けながら、健全な持続可能な世の中が実現し続けている。

全人類レベルのライフは、究極の再生可能エネルギーの恩恵を受けながら、ますます健やかに暮らし続けている。

食糧問題、燃料問題を含むエネルギー問題も、スカッと解消され続けている。

各種の気候帯の間の自然の恵みの格差も、全く解消されている。

紛争問題も、すっかり解消され続けている。

水不足、砂漠化、気候変動、環境汚染、生態系破壊…を含む環境問題も、きちっと解決され続けている。

自然治癒力も重視されながら、人口問題を含む医療問題の多くも、しっかり解消され続けている。

…

どれもこれも、十分に成熟した自然知愛、そして、十分に成熟した自然科学が、みんなに共有されながら、みんなのために、有効活用され続けているおかげで——。

音楽 ♪夏 Summer イン ミライのいつかのある日その1へ続く

ミライのいつかのある日その1

とある学校（～12歳）の夏の授業風景——。

「今日は、エネルギーが消費することを確かめる実験をします。

みなさんは、高いところから物体が落ちている間に、物体の速さが増すことを知っていますね？」

「はい♪」

「それでは、この、高いところから落ちている間に速さが増すことによって、物体が獲得するエネルギー、詳しくは運動エネルギーによって、物体が床に落ちたときに何が起こるかについて、具体例を挙げて説明してみてください」

「——高い所から床に落ちたボールは、弾みます」

「そうですね。高い所から床に落ちたボールは、弾みますね。

ほかには、ありますか？」

「高い所から床に落ちた卵は、べちゃっとつぶれてしまいます」

「泥だんごも、べちゃっとつぶれてしまうわ」

「雪玉も、べちゃっとつぶれてしまうよ」

「そうですね。高い所から床に落ちた、卵や泥だんご、雪玉は、べちゃっとつぶれますね。ほかには、ありますか？」

「——高いところから床に落ちた陶器やガラスのお皿は、大きな音を立てて、割れてしまいます」

「その通りですね」

「プラスチックや金属のお皿ならば、弾んで大きな音が出るよ」

「そうですね。ほかにはないですか？」

「カスタネットやタンバリンならば、弾んで楽器の音が鳴るわ」

「その通りですね。ほかにも、まだまだ、たくさんあると思います。

高いところから床へと物体が落ちると、弾んだり、つぶれたり、割れたり、音が鳴ったり…します。

それでは、高いところから床へと物体が落ちた際に、弾んだり、つぶれたり、割れたり、音が鳴ったり…するためのエネルギー源は何でしょうか？」

「高い所から落ちている間に物体が獲得する運動エネルギーです」

「大正解です」

「先生、自分で、最初に正解を話していたじゃん」

「フフフッ。そうでしたね。

つまり、高い所から床まで落ちている間に物体が獲得した運動エネルギーが、物体が弾んだり、つぶれたり、割れたり、音を出したり…の変化を引き起こすためのエネルギー源になったのです。

それでは、次に、物体をそうっと床に下ろすことを考えてみましょう。例えば、ボールをそうっと床に下ろしたら、どうなりますか？」

「弾みませんし、音を出しません」

「そうですね。卵をそうっと床に下ろしたらどうなりますか？」

「卵は割れませんし、丸い形のままです」

「そのとおりですね。泥だんごや雪玉は、どうですか？」

「泥だんごや雪玉は割れず、そのまま丸い形のままです」

「そうですね。お皿は、どうですか？」

「割れませんし、弾みませんし、音を出しません」

「カスタネットやタンバリンは、どうでしょうか？」

「音を出しません。静かなままです」

「それでは、物体をそうっと床に下ろしたときは、なぜ、そうならず、そのままになるのでしょうか？」

さきほどの、物体が弾んだり、つぶれたり、割れたり、音を出したり…するためのエネルギー源、運動エネルギーが、どうなったからでしょうか？」

「そんなの簡単だよ。運動エネルギーが消滅したからだよ」「エネルギーが消滅しうるのは、常識中の常識だわ」…

「そうですね。よく知られているように、運動エネルギーが消滅したからです。

今、みなさんは、エネルギーが消滅しうることを、あたりまえの常識として知っています。

しかし、過去に、何百年もの間、“エネルギーは消滅しない。エネルギーは永久不滅である”と、心底思い込み続けていた時代が、人類にはありました。

かつて、あらゆる物理学の教授や教師も含めて、ほとんどの人間が、エネルギーは永久不滅だと思い込んでいたのです」

「先生、どうして、そんなに、おバカさんだったのですか？」

「これこれ、おバカさんなんて決して言ってはなりませんよ。逆に利口すぎたのかもしれないのですから。

当時の人類にとって、エネルギーの永久不滅こそが、最新最高の自然科学の基礎だったのです。例外のないエネルギー保存則は、当時、あらゆる教科書に印刷され、あらゆる教師が教え、あらゆる生徒・学生が学んで身につけていた常識だったのです。当時、あらゆる学者が、この例外のないエネルギー保存則を常識にしながら学問

を育んでいました。当時は、老若男女、ほとんど誰もが、心の底から、例外のないエネルギー保存則が最も普遍的な真理だと思い込んでいたのです。当時、人類最高の頭脳を持っていると崇められていたアインシュタインという物理学者も例外ではありませんでした」

「それなのに、どうして、人類は、エネルギーが消滅しうることに気づくことができたのですか？」

「それは、ココエのおかげです。ココエが、初めて、はっきりとエネルギーが消滅しうることを体系的に示したおかげだったのです」

「知ってる、知ってる。ココエのりんごだろ？」「有名だよね」

「そうですね。万有引力の法則がニュートンのりんごならば、エネルギーの消滅はココエのりんごですね。

ココエは、考えごとに没頭しているときに、手に持っていた大好きなりんごを、あやまって落としてしまったのです。

りんごは、床に落ちてしまい大きな音を立てました。

ココエは、そのりんごを拾い上げると、大好きなりんごの傷つきよう、へこみようを見て、嘆きました。

でも、そのあと、ココエは、ピンときたのです。

高い所から落としたりんごは、傷ついたり、へこんだり、音を立てたりする。しかし、そうっと下ろしたりんごは、傷つかないし、へこまないし、音が鳴らない。これは、いったいなぜなのか？

ココエは、その疑問を、とことん、つきつめ続けました。そのような思索の結果生まれた成果が、当時の常識を覆していた“エネルギーの消滅”の発見であり、そのことが、彼が育んでいた新しい物理学を支えることになりました」

「おもしろい♪」「おもしろいね♪」

「おもしろいですね。」

ニュートンは、落下するりんごをヒントにして、万有引力の法則を発見したと言われている。

ココエは、あやまって落としてしまったりんごをヒントにして、エネルギーの消滅を発見したと言われている。

さあ、みなさんも、りんごから、新しい何かを発見できるかもしれませんよ。チャレンジしてみてくださいね♪」

「ハーイ♪」

音楽終了 ♪夏 Summer

ミライのいつかのある日その2

とある学校（～15歳）の秋の授業風景——。

音楽イン ♪秋 Autumn

「みんなも知っているように—— かつて、エネルギーは永久不滅であり、生成も消滅もしないと心底信じていた人が大多数だった時代が300年以上も続いたんだ。当時、最も有名で偉大だった物理学者の一人、アインシュタインまでも心底信じきっていたほどだった。

このエネルギーの永久不滅の原理を土台にする例外のないエネルギー保存則は、当時の最新最高の科学の1つ、一般相対性理論を育む支えになったことを含め、ある程度は確かに役立っていた。

しかし、そのせいで、物理学という学問は迷路にはまり、その進歩が停滞し、人類は、究極の再生可能エネルギーの十分な健やかな利用から長らく遠ざかり続けることになった——」

「300年も、例外のないエネルギー保存則を信じていた人々が、ほ

とんどだった時代があるなんて信じられないよ」「例外のないエネルギー保存則のせいで、究極の再生可能エネルギーの十分な健やかな利用から長らく遠ざかっていたなんて、当時の人々は、なんて愚かだったんだろう」

「こらこら、決して愚かなんて言うてはいけないよ。彼らは、一生懸命、全力で、心底、そう思いこみ続けていたのだから。

——みんなは、どうして、こうなったと思うだろうか？」

「人は流されやすいからよ」「自分を守るために同調するからさ」

「不安だったからだわ」「疲れていたからよ」「何となくさ」

「地球中心が好きだったように、永久不滅が好きだったからよ」…

「そうだね。どれも原因として考えられる」

「先生は、どう思っておられるのですか？」

「先生は、思うんだ。結局は、多くの人が、心の自由を持っていなかったからじゃないかって——。

もし、多くの人が心の自由を持っていて、自由に感じて、自由に考える習慣を持っていたら、決して、こうはなり続けなかっただろうって——。

「——」

「今は、りんご、卵、皿、ボール、楽器…をそうっと下ろす過程、たったこれだけの簡単な過程によって、エネルギーの消滅が実証されていることに、誰でも気づくことができる」

「ココエのりんご——。誰でも、どこでも簡単に実証できる、わかりきった常識です」生徒の一人のつぶやき。

「ところが、かつての人々にとっては、その常識が、逆に、とんで

もない、ばかげた非常識だった。先生が注目してほしいのは、人類が、その今の常識に気づくまでの300年もの間、何十億何百億人もの人々が、物をそうと下ろす過程を体験していたことだよ」

「——」

「目の前でエネルギー消滅の実証実験が何億回も何兆回も繰り返されていたのに、そのことに誰も気づけなかったのは、なぜだったのだろうか？ ここで改めて考えてみてほしいんだ。

いや、もしかしたら、誰かは、とっくに気づいていたのかもしれない。でも、とっくに気づいていた誰かも、なぜ、そのことについて深く考えようとしなかったのだろうか？あるいは、その考えを公表しようとしなかったのは、なぜだったのか？ そんなふうにも考えてみてほしいんだ」

「——先生は、心の自由を持っていなかったからだとお考えなのですね？」

「そうだね。先生は、誰もが身につけていた当時の古い常識が、結局、心の自由を奪い続けていたからじゃないかと思っている。

より具体的には、例外のないエネルギー保存則という古い常識にしばられていた者が、新しい常識の芽に“非常識なナンセンス”とレッテルを貼って排除していた時代であつたがゆえに、不安が植えつけられ、人々の自由な感情のあり方、自由な思考のあり方が奪われ続けたからだと思っている。

それは、まるで、裸の王様を目の前にしているのに、みんなで口をそろえて、“見事な服を着ている”と言い張り続けていたような時代であり続けていたからとも言えるだろう。

そのような時代が、300年以上もの間、続いていたんだ——」

「信じられないわ」「信じられないよ、先生」

「信じられなくても、事実だよ。エネルギーの永久不滅を300年以上もの間、人類は、みんなして肯定し続けていたんだ。

その間、誰も、裸の王様が裸だとは言えなかったんだ。

当時の、最も優秀で、最も疑り深かった物理学者の一人アインシュタインでさえも、死ぬまで裸だと言えなかったくらいに——」

「先生、地球の周りを太陽が回っていたと信じられていた時代に起きていたことと似ていますね？」

「そうだね。似ているね。天動説が信じられていたのは、2000年もの間だったけれど——」

「2000年！」

「この場合、人類は、2000年もの間、裸の王様が裸である事実を認められなかったことになる——」

「——」

「あらゆる常識は、誰も疑問を投げかけないからこそ常識であり続ける。だから、あらゆる常識は、周りに流されて思考停止したまま何となく鵜呑みにし続けているおかげで保たれている幻想にすぎない可能性を秘めているんだ。“裸の王様は美しい服を着ている”と同等な幻想にすぎない可能性を——。

一方で、思考停止したまま常識を守り続けることは、同時に自身の不安を減らすことにもつながっている。思考停止したまま“裸の王様は、裸だ！”と指摘せずに“裸の王様は美しい服を着ている”と思い込み続けることが自身の不安を減らしていただろうように。

だから、何かの常識を守り続ける者は、自身の不安を減らし続けたいからこそ、たとえ幻想であっても、この常識に疑問を抱く者を反射的に排除してしまう。

ただ、そのせいで――

ブルーノは、火あぶりにあってしまった。

ガリレオは、死ぬまで自由を奪われ続けた」

そして、ココエは、失職してストレスで早々と死んでしまった」

「かわいそう」

「そうだね。君たちは、ココエのりんごについてだけでなく、“ココエの苦難”についても、よく知っていると思う。

――確かに、ココエは、かわいそうだったけれど、ココエのりんごを含むココエの成果がきっかけとなって、人類は、例外のないエネルギー保存則という古い常識、幻想的な常識を覆すことができた。

最初の頃、気づいた人は、ごく少数だけだった。

それでも、少しずつ少しずつ増え続けたんだ。

研究ポストについていない無給のボランティア科学者も、研究ポストについている有給の科学者も、ともに気づき始めた。

中には、“エネルギーの永久不滅性の考えや例外のないエネルギー保存則の考えに基づいて、エネルギー消滅やエネルギー生成を完全否定すること”のナンセンスさに気づいた人もいた。

中には、リスクをかえりみず、支持を表明する者も現れた。

それもこれも、多くの人が古い常識をよく確かめるべく、自由に感じながら、自由に考えながら、それぞれのやり方で再発見し、“ココエ体験”を満喫したおかげだった。

直視した自然についての現実を勇気を振りしぼって公表してくれた方々がいたおかげで、古い常識についての気づきが広まり続けた。

数人が気づき、数十人が気づき、数百人が気づき、数千人が気づき、数万人が気づき…そんなふうにして古い常識への気づきが指数関数的に広まり続け、いつしか、エネルギーの非永久不滅性、エネルギー保存則の例外は、人類にとっての新しい常識となった。

2000年以上かけて「地球中心、天動説」の呪縛が解かれたように―― 300年以上かけて、ついに「永久不滅のエネルギー、例外のないエネルギー保存則」の呪縛も解かれたんだ。

その結果、全人類は、ついに、究極の再生可能エネルギーの十分な活用に、健やかに取り組める足がかりを得た。

おかげで、全人類は、さらなる飛躍を遂げることができた。

地球環境や地球生態系、全人類の営みを支えるためのエネルギー源として、環境に優しい究極の再生可能エネルギーを上手に活用しながら、全人類は、ますます住み良くなった地球上で、ますます快適さを増し続けた。

エネルギー不足問題もなくなった。

食糧不足問題もなくなった。水不足問題もなくなった。

多様な気候帯の間の自然の恵みの格差もなくなった。

気候変動を自在にコントロールできるようにもなった。

過剰な温暖化や寒冷化の予防も可能になった。

天体の地球落下の予防も、より簡単に可能になった。

これらのことは、健やかに地球上で暮らしていくことだけでなく、健やかに別の天体へ進出することも助けた。

誰もが心豊かになった。自由時間が増えた。余暇が増えた。

誰もが自分の才能をイキイキと開花させる、健やかな自己実現社会が到来した。

楽しみが増えた。喜びが増えた。安らぎが増えた。

健康が増えた。笑顔が増えた。心笑が増えた。

ニコニコが増えた。イキイキが増えた。ワクワクが増えた。ウキウキが増えた。ホワホワが増えた。ピンピンが増えた。ユウユウが増えた。

…

つまり、現在があるのは、あれもこれも、みんな一人一人が、心の自由を取り戻し、自由に感じ、自由に考え始め、ただ何となく鵜呑みにして受け入れていた古い常識の真偽をよく確かめ続けたおかげだったんだ。ココエのりんごも、いいきっかけの1つになりながら――。

それは、同時に、みんな一人一人の心の再生、復興、全快…のおかげ、一人一人の、クヨクヨ、ビクビク、オドオド、ウツウツ、モンモン、ヘトヘト、ムカムカ、イライラ、ピリピリ…から、ニコニコ、イキイキ、ワクワク、ウキウキ、スイスイ、ヒョウヒョウ、ホワホワ、アイアイ、ルンルン、ピンピン、ユウユウ…への主体的な方向転換のおかげでもあった。

この主体的な方向転換が、私たちの中にもともと備わっている、自然治癒力の根幹であり、再生可能^{こころ}エネルギーの根源なんだ。

再生可能^{こころ}エネルギーという言葉をもっと最初に使い始めたのは、まさに、究極の再生可能エネルギーという言葉をもっと最初に使い始めたココ

エ自身だった。

ココエは、この再生可能^{こころ}エネルギーのおかげで、心の自由を得ることができ、数々の絶望を乗り越えながら、すばらしい成果を誕生させることができた。

つまり、人類を飛躍させる究極の再生可能エネルギーの十分な健やかな利用をもたらした大元は―― 心の自由を生んだ再生可能^{こころ}エネルギーでもあったんだ」

「おもしろい♪」

「そうだね。おもしろいね。」

だから、みんなは、頭だけでもなく、体だけでもなく、ぜひ、心も大事にし続けてほしい。ココエのように――」

「ハイイ♪」

音楽フェード・アウト ♪秋 Autumn

ミライのいつかのある日その3

とある学校（～18歳）の冬の授業風景――。

音楽イン ♪冬 Winter

「かつて、人類は病を患い、長い暗黒時代を過ごし続けました。

パイ取り合戦、フルーツ争奪合戦、不満足、不知足、相互破壊、相互絶滅…これらの病、Against Life 病に、人類が翻弄され続けた時代を何と呼びますか？」

「“人類の進化の傷あと時代”と呼びます」

「そうですね。この時代に、人類は、さんざん、不幸を経験し、不幸をまき散らし合い、不幸を互いに強要し合い続けました。

そう。人類は、何百年何千年もの長い間、まさに病を患っていたのです。

音楽フェード・アウト ♪冬 Winter

音楽イン ♪春 Spring

しかし、人類は、病を治し、どうにか健やかに再生できました」

「誰のおかげでしたか？」

「当時の、みんな一人一人のおかげです」

「当時の、みんな一人一人の何のおかげでしたか？」

「当時の、みんな一人一人の気づきのおかげです」

「当時の、みんな一人一人の、何の気づきのおかげでしたか？」

「常識ですよ。Against Life 病が蔓延していること、健全さを取り戻すためには、最終的に、For All Life 路線こそをとり続けることが大事であることの気づきのおかげです」

「その通りですね。ココエが活躍していたころから、あらゆる分野、あらゆる場面において、Against Life 病が蔓延していることに、気づいたきっかけです。

それは、人間社会におけるあらゆる苦難、害悪、罪悪の本質が、“他者が犠牲になるのはよく、自分らさえよければいい” 的な発想に基づく Against Life 病であることに気づいたきっかけであり、同時に、人間社会におけるあらゆる幸福、善益、功德の本質が、“自分らだけでなく、みんなも喜ぶことこそがよい” 的な発想に基づく For All Life 路線であることに気づいたきっかけでもあります。

それは、この地球上であらゆる人間社会どうしが争い合い続けることが、個体の中であらゆる細胞社会どうしが争い合い続けるほどに、愚かで不健康であることに気づいたきっかけでもあります。

つまり、一人一人が、Against All Life 病が、あらゆる不健全さ——邪悪さ、醜さ、不毛さ、不調和、不快さ、不信、憎しみ…の根源であることに心の底から気づき、その上で、一人一人が、あらゆる健やかさ——善良さ、美しさ、豊かな実り、調和、心地よさ、信頼、感謝…の根源である For All Life 路線をとるように心の底から転換することが、みんなに広まり続けたからこそ、人類全体も気づき、再生できたのです。

この時代のことは、ふつう、何時代と呼ばれていますか？」

「ルネサックス時代と呼ばれています」

「そうですね」

「先生、ルネサンス時代ではなく、ルネサックス時代と呼ばれているのは、なぜですか？」

「わかりません。

いずれにせよ、このルネサックス時代に、一人一人の気づきのおかげで、それまで人類の中で、ひどく流行^{はや}っていた Against Life 病が少しずつ克服され、For All Life 路線の健康な状態への再生が少しずつ広まり続け、ついに全人類が健康を取り戻すに至ったのです」

「どうして、ルネサックス時代に、それが起こったのですか？」

「さまざまな要因が考えられています。

その中で、特に、ココエのりんごの実証実験を通じた気づき、および、その気づきをきっかけとした、心の底からの再生——ビクビク、クヨクヨ、モンモン、ヘトヘト、ビリビリ…から、ニコニコ、イキイキ、ワクワク、ウキウキ、ホワホワ…への心の再生——が広まり続けたことが大きかったと言われています。

さらには、ココエの示した再生可能^{こころ}心エネルギーの考えも、大きな影響をおよぼしたとも言われています。

ですので、ルネサンス時代は、“心再生”時代、あるいは、ときに“心笑再生”時代とも呼ばれています。

——ココエは、次のような言葉を残しました。

“電荷エネルギーや磁極エネルギーがくめども尽きない究極の再生可能エネルギーであるとするならば、心のエネルギーは、くめどもくめども尽きない超究極の再生可能エネルギーである——”

彼は、何度も何度も絶望を乗り越え続けながら、健やかな自己フルーツ化——“自己実現 For All Life”を果たしました。

彼は、すてきな“フルーツ For All Life”を生み出しました。

私たちも彼を多くに見習いましょう」

「ハーイ♪」

「そこで、最後の課題です。

みなさんは、どのような健やかな自己フルーツ化——どのような“自己実現 For All Life”を果たしたいでしょうか？

君らは、どんな“フルーツ For All Life”を生み出したいですか？

それを、少しずつ、レポートにまとめてみてください。

提出義務は、ありません。

提出期限も、ありません。

高校を卒業してから、提出してもかまいません。

大学を卒業してから、提出してもかまいません。

就職してから、提出してもかまいません。

結婚してから、提出してもかまいません。

社会人を引退してから、提出してもかまいません。

...

ゆっくり、自分自身を見つめながらまとめてみてくださいね。

もし提出しなくなったら、いつでも提出しにいらっしゃい。

教師たちは、代々、受付を引き継いでおきますから——。

今日は、この学校生活、最後の歴史の授業ですね。

少し、早いですが、みなさん、ご卒業、おめでとう。

みなさんの活躍を楽しみにしています」

音楽終了 ♪春 Spring

はるかにミライのいつか——

地球上で誕生した健やかな全人類レベルのライフは、天体生態系社会レベルのライフ——宇宙生態系レベルのライフの一員として健やかに宇宙デビューを果たしながら、立派に活躍し続けている——。

どこかの天体での核爆発の発生シグナルがキャッチされた。

「はあー、始まってしまったわ」

「また核爆弾を使い始めてしまったよ」

「ある意味、いずれ、遅かれ早かれ、この道をたどることが少ないのだけれど——」

「ただ、それでも、今回は、まだ望みがありそうよ」

「なんといっても被爆種が、全く復讐しようとしていないからね」

「復讐するどころか、核兵器の廃絶を率先して推進しているからね」

「そうね。でも、これが、レアで貴重な一歩だって聞いたわ。」

それにしても、どうして、多くの異星人類の一部の種は、病み続けて復讐に燃え続けてしまうのかしら」

「1つは、被害者の無念に心を痛めて悲しみが止まらず、心が安らかにならないままだからだろうね。ある意味優しすぎるのさ。でも、全く気の毒なことさ。1つの天体の中で病み続けて、アンチ非自種の方針をとり続けてしまうことは、1つの人体の中で病み続けて、アンチ非自細胞、アンチ非組織、アンチ非器官の方針をとり続けてしまうほど愚かで、新たな悲惨な結果を招いてしまうのだから」

「そうね。悲しくてつらいけれど、この愚かさや新たな悲惨さに自ら気づいて自身で病を克服できるような賢い人類でなければ、宇宙デビューする資格はない。アンチ非自種を正当化し続けるような愚

かな未熟人類は、厳しいけれど、地球からも退場してもらわないといけない。次の新しい人類にチャンスを与えるためにも——。

もちろん、最初から宇宙デビューの資格があるなんてことは稀で、“罪を憎んで種を憎まず”の言葉が示唆しているように、過ちに気づいて軌道修正する可能性がある限り、本来どの未熟人類にも資格を得る望みがある」

音楽イン ♪ Birthtime

「ひとまずは、チャンスを与えられた、この新しい異星人類に、病から再生して無事に育ち続けることを期待するしかないですね」

「そうですね。どうか病が治って無事に育ち続けますように——」

「今回の新異星人類は、病から再生できて、無事に育ち続けて、健やかな誕生に至り、愛されながら繁栄し、宇宙の宝となれるだろうか？ それとも、病から再生できないうで、流産して、あるいは、中絶させられて、健やかな誕生を果たせず、疎まれながら滅亡し、宇宙の屑となるだろうか？」

「早く気づいてほしいね。この重大な分岐点の存在に——。

病から再生できれば、存続。誕生。愛され、繁栄。宝。

病から再生できなければ、流産。中絶。疎まれ、滅亡。屑。

そんな、あたりまえのことに——」

「本当に、早く気づいてほしいよ。

病から再生できなければ、他滅だけでなく自滅が待っているということ。そんなに、悲劇的でもつたいないことに——」

「本当に、早く気づいてほしいね。病から再生できれば、みんなが存続できて、健やかに誕生&宇宙デビューできて、いいことずくめが待っていること。そんなに、おいしくてありがたいことに——」

「この分岐点の存在を、今すぐ教えてあげたいけれど、自然治癒を待つしかない——」

「お願い。早く気づいて。早く」

「気づいて、病から再生できれば、この新異星人類も、健やかな恒久的平和、健やかな宇宙デビューにたどり着ける」

「たどり着いてほしいね。

新しい人類も、いつかここへ——」

「全く、そうだね。——気づいてくれ！ 気づいてくれ！ 再生してくれ！ 再生してくれ！ どうか、無事に育ち続けてくれ！」

「無事に育って！ 無事に育って！

そうして、無事に、宇宙へ誕生してきて！ そうして、この宇宙の新たな宝になって！ そうして、お祝いされて、愛され続けて！」

「ルネサンクス、ルネサンクス、ルネサンココエ、ピピピーピピー♪」

「なんですか？ それは」

「はるかなカコから伝わるという、おまじないでござる」

「不思議な響き——。 ——ルネサンクス、ルネサンクス、ルネサンココエ、ピピピーピピー♪」

...

音楽エンドロールに続く ♪ Birthtime

7つのワクワク枠 / The 7 Frames For All Life

エピローグ

～分岐点～

【完】

さんぽフルーツ【物語 3.31】『7つのワクワク枠』《10》
エピローグ～分岐点～ 2023年7月 - 2025年1月